

張籍詩訳注 (16)

——「賈客樂」「羈旅行」——

畑村 学
橋 英範

The Translation and Annotation of the Verses Which Zhang Ji Wrote (16)

Manabu HATAMURA
Hidenori TACHIBANA

要旨 本稿は、中唐の詩人・張籍の詩の訳注(16)である。本篇には、31「賈客樂」・32「羈旅行」(ともに中華書局『張籍詩集』卷一)の訳注を掲載する。

訳注

31 賈客樂

【題解】

行商人の曲。「估客樂」に同じで、「賈客」は各地を旅をしながら売買を行う商人。『樂府詩集』卷四八清商曲辭「西曲歌」に属する樂府として、「石城樂」「莫愁樂」「襄陽樂」などの樂府とともに載録される。よって、「樂」は本来「音樂、樂曲」の意味であり、張籍以前の同題樂府では問題なくそのように解釈できるが、張籍や同時代で同題樂府を遺している元稹の場合、「音樂」であると同時に「楽しい」のニュアンスも含んだ二重の意味で使われているようだ。このことについては、この詩のテーマ及び中唐期の賈客を詠じた樂府との関係から【補】で論ずることにしたい。詩題は、ひとまず音樂の意味で訳しておいた。

同題樂府は、齊の武帝(蕭蹟)に始まり、釈宝月、陳の後主、唐代に入り

李白の作があり、先に記したように同時代の元稹にも同題樂府がある。元稹の詩は、元稹の本集では「樂府古題」と題する連作樂府の一首であり、冒頭に付された序に拠れば、もともとこの連作は梁州出身の進士である劉猛と李餘の作に唱和したものであった。うち「估客樂」は李餘の作に和したものであり、李餘にも同題の樂府があったことがわかるが、李餘の詩は現在は散佚して見ることができない。

また「賈客詞」が、『樂府詩集』に同じく「西曲歌」に属する樂府として「估客樂」に引き続いて載録されており、北周の庾信(本集では「和江中賈客詩」となっている)、中唐の劉禹錫、晩唐の劉駕の作が掲載されている。内容的に「賈客樂」と共通し、【補】で一緒に扱うことにする。

二〇〇七年十二月十日(受理)

畑村 学 宇部工業高等専門学校 一般科准教授
橋 英範 岡山大学文学部言語文科学科准教授

楽府「估客楽」の起源については、『楽府詩集』の解題に次のように言う。

『古今楽録』曰、「估客楽」者、齊武帝之所製也。帝布衣時、嘗遊樊、鄧。登祚以後、追憶往事而作歌。使樂府令劉瑤管弦被之教習、卒遂無成。有人啓積宝月善解音律。帝使奏之。旬日之中、便就諧合。勅歌者常重為感憶之声。猶行於世。宝月又上兩曲。帝數乘龍舟、遊五城江中放觀。……」。『唐書』樂志曰、「梁改其名為『商旅行』」。

『古今楽録』に曰く、「估客楽」は、齊の武帝の製する所なり。帝 布衣の時、嘗て樊、鄧に遊ぶ。登祚以後、往事を追憶して歌を作る。樂府令劉瑤をして管弦もて之を被りて教習せしむるも、卒遂に成る無し。人の積宝月善く音律を解するを啓する有り。帝 之を奏せしむ。旬日の中、便ち就に諧合す。歌者に勅して常に「感憶」(武帝の詩の第3句冒頭の二字)の声を為すを重んぜしむ。猶お世に行わる。(積)宝月 又兩曲を上る。帝 數しば龍舟に乗じ、五城の江中に遊んで放觀す。……」。『唐書』樂志に曰く、「梁は其の名を改めて『商旅行』と為す」と。

これによれば、「估客楽」はもともと齊の武帝が皇位につく以前、布衣の時に樊、鄧の地(漢水の主流域、襄陽付近)に遊んだ時のことを追憶し、積宝月に作らせ、樂人に演奏させたものである。また、梁の時には「商旅行」と改めたという。

各注釈書は、当時の社会問題を扱った詩であり、各地を移動することで納税の義務から逃れて暴利を貪る商人と、対照的に土地に縛られて重税に苦しむ農民を対比した諷諭的な作品であると解釈する点で共通している。この詩のテーマについては、張籍以前の「賈客楽」及び中唐の元稹の同題樂府、劉禹錫「賈客詞」との比較を通じて【補】で述べることにする。

【本文・書き下し文】

- 1 金陵向西賈客多 金陵の向西 賈客多し
- 2 船中生長樂風波 船中に生長して 風波を樂しむ
- 3 欲發移船近江口 発せんと欲し 船を移して江口に近づき
- 4 船頭祭神各澆酒 船頭 神を祭りて 各おの酒を澆ぐ
- 5 停杯共說遠行期 杯を停めて共に説く 遠行の期
- 6 入蜀經蠻誰別離 蜀に入り蠻を経るも 誰と別離せんや
- 7 金多衆中爲上客 金 衆中に多きを上客と爲し
- 8 夜夜算縉眠獨遲 夜夜 縉を算えて 眠ること独り遅し

- 9 秋江初月猩猩語 秋江 初月 猩猩の語
- 10 孤帆夜發瀟湘渚 孤帆 夜に瀟湘の渚を發す
- 11 水工持檝防暗灘 水工 檝を持ちて 暗灘を防ぎ
- 12 直過山邊及前侶 直ちに山邊を過ぎて 前侶に及ぶ
- 13 年年逐利西復東 年年利を逐いて 西し復た東し
- 14 姓名不在縣籍中 姓名は県籍の中に在らず
- 15 農夫稅多長辛苦 農夫稅多くして 長に辛苦し
- 16 棄業寧爲販寶翁 業を棄て 寧る販寶の翁と為らん

【口語訳】

- 1 金陵から西には 賈客が多く
- 2 船のなかで生まれ育ち 風や波を樂しんでいる
- 3 出發しようとして 船を移して長江への入口に近づき
- 4 船の船先で水神を祭るため それぞれ酒を江にそそいで祈禱する
- 5 杯を置き ともに遠い旅の予定を語り合い
- 6 蜀に入り南蠻を経過するのに 誰が仲間と別れよう
- 7 みなのなかで 一番の金持ちを上客と呼び
- 8 夜な夜な縉銭を数えて 一人だけ眠るのが遅くなる
- 9 秋の江に三日月がかかり 猩猩の話し声が聞こえるなか
- 10 いくつかの帆掛け船は 夜 湘水の渚を出發する
- 11 水夫たちは 楫を握って暗礁から船を守り
- 12 一直線に山のそばを通過して 先をゆく友に追いつこうとするのだ
- 13 毎年 利益を追いかけて 西へ東への旅をし
- 14 そのため 氏名は県の戸籍簿には載っていない
- 15 農夫は重税を課せられて いつも苦しんでおり
- 16 農家をやめて どうせなら宝石売りのじじいとなったほうがいい

【押韻】

- 多―下平七歌、波―下平八戈(同用)
 口―上声四五厚、酒―上声四四有(同用)
 期―上平七之、離―上平五支、遅―上平六脂(同用)
 語・渚・侶―上声八語
 東・中・翁―上平一東

【語釈】

1・2 金陵向西賈客多、船中生長樂風波

「金陵向西」金陵の西方。具体的には長江中流域の地を指してこのように言っている。西曲歌に属する樂府のなかには、長江及び漢水沿岸の地で発生した民歌がもとになっているものが多くあり、こうした地域を旅する商人によって歌われていた。(増田清秀氏『樂府の歴史的研究』、「清商曲の源流と南朝の吳歌西曲」参照。創文社、一九七五年)。「賈(估)客樂」は【題解】で述べたように齊の武帝が庶民の時に漢水上流域の樊、鄧に遊んだ、その時のことを追憶して歌ったものであり、詩中の人物の身分は定かではない。しかし、後の同題樂府はいずれも長江流域を船で旅する商人の立場で歌われている。張籍のこの詩でもそうした過去の同題樂府を踏まえ、金陵から西、長江中流域を旅する商人の多さを詠っているものと解釈した。

「金陵」は現在の江蘇省南京市。六朝時代、歴代の都・建康が置かれた。唐代の南京は六朝の頃の賑わいはすでに失われていたが、街の南を流れる秦淮河沿いには、旅人や賈客が集う妓樓街が建ち並び、わずかに栄えていた。その様子は有名な杜牧「泊秦淮」に詠われている。張籍のこの詩でも長江を行き来する賈客が行商の途中に停泊する場所として金陵が詠われている。

一般名詞ではなく、固有名詞としての用例は、詩では謝朓「鼓吹曲」(『文選』卷二八)に、「江南佳麗地、金陵帝王州」(江南 佳麗の地、金陵 帝王の州)とあるのが代表的であり、李善注所引『吳録』に、「張紘言於孫權曰、秣陵、楚武王所置、名為金陵。秦始皇時、望氣者云、金陵有王者氣。故斷連崗、改名秣陵也」(張紘 孫權に言いて曰く、秣陵は、楚の武王の置く所なり。名づけて金陵と為す。秦始皇の時、氣を望む者云う、金陵に王者の氣有り、と。故に連崗を斷ち、改めて秣陵と名づくるなり、と)と言う。

唐詩の用例は初唐から見える。宋之問「発端州初入西江」(『全唐詩』卷五三)に、「金陵有仙館、即事尋丹梯」(金陵に仙館有り、即事 丹梯を尋ぬ)とあり、李頎「送劉昱」(同卷一三三)に、「行人夜宿金陵渚、試聽沙辺有雁聲」(行人 夜に宿る 金陵の渚、試みに聴けば 沙辺に雁声有り)とある。後者は船旅をする旅人が宿泊する場所として金陵が詠われている。唐代の詩人では、李白が実際にこの地を訪れ、金陵を舞台にした数多くの名篇を残したことで有名である。

杜甫の詩には用例がない。張籍にはこの他一例、423「春江曲」(卷七)に、「妾身生長金陵側、去年夫婿住江北」(妾身 生長す 金陵の側、去年 夫婿 江北に住く)とあるのは、金陵で生まれ育ち、行商人の夫を持つ妻の立場で詠われている。

「向西」は西側、すなわち西の意味。徐注に、金陵は長江の東岸にあり、そのために商船は金陵の西に停泊すると説明し、船の停泊する場所と解釈する。李冬生注は、金陵は長江下流にあり、そのため人々の多くは長江を西にさかのぼり、内地に行つて商売を行うと説明する。李建崑注は、金陵から西は長江中下流域であり、長江沿いは商業活動が非常に盛況である。だから1句のように言った、と説明する。徐注のみ「向西」を金陵周辺の地として解釈するが、ここでは金陵から西の地域、具体的には金陵を遡った長江中流域を指し、現在商用で金陵に来ていた賈客が商売を行う地域を指すと解釈した。

「賈客」は行商人。旅を続けながら物の売買をする商人。張籍の9「野老歌」(卷一)に、「西江賈客珠萬斛、船中養犬長食肉」(西江の賈客 珠 萬斛、船中 犬を養いて 長に肉を食らわしむ)とあった。その【語釈】を参照。「野老歌」とこの詩との関連については【補】で考察する。

「船中生長」船のなかで生まれ育つ。
「生長」は古くから用例のあることば。『晏子春秋』内篇雜下に、「今民生長于齊不盜、入楚則盜。得無楚之水土使民善盜耶」(今 民 齊に生長して盜まらず、楚に入れば則ち盜む。楚の水土 民をして盜を善くせしむること無きを得んや)とあり、『史記』高祖本紀にも、高祖のセリフとして「豊、吾所生長、極不忘耳」(豊は、吾が生長せし所なり。極めて忘れざるのみ)と見える。

詩では、後漢の蔡琰作として伝えられる「胡笳十八拍」(『古詩紀』卷一四)に、「鞠之育之兮不羞恥、愍之念之兮生長辺鄙」(之を鞠い之を育てて羞恥せず、之を愍れみ之を念いて辺鄙に生長す)とあり、劉宋(或いは梁)の任豫「夏潦省宅詩」(『類聚』卷六四)に、「生長數十載、幸祐見衰白」(生長すること 数十載、幸祐 衰白を見る)とある。「賈客樂」と同じく『樂府詩集』において西曲歌に属する「石城樂」(『玉臺新詠』卷一〇)に、「生長石城下、開門對城樓」(生長す 石城の下、門を開けば城樓に對す)とあるのもこのことと同じく生まれ育つという意味で用いられている。

唐詩では、盛唐の頃から用例が見られるようになる。儲光羲「同王十三維偶然作十首」其六(『全唐詩』卷一三七)に、「妾本邯鄲女、生長在叢臺」(妾は本 邯鄲の女、生長して叢臺に在り)とある。

杜甫に二例、うち「詠懷古跡五首」其三(『詳注』卷一七)は、漢の王昭君の出身地を訪れての作であり、そのなかに「群山万壑赴荆門、生長明妃尚有村」(群山 万壑 荆門に赴く、明妃を生長す 尚お村有り)と見える。

張籍にはこの他にもう一例、先に「金陵」のところで挙げた423「春江曲」(卷七)に、「妾身生長金陵側、去年夫婿住江北」(妾身 生長す 金陵の側、

去年 夫婿 江北に住く」とあり、行商人の夫を持つ妻が金陵で生まれ育ったと詠うなかに見える。

張籍と同時代の人である李肇『唐国史補』巻下には、中国東南地域における商船による商売の隆盛を記す一文が見えるが、その中に中唐前期の大曆から貞元にかけて、愈大娘という人物の船が最も大きく、日常生活だけでなく葬儀や結婚式も船上で行われていたことを記して以下のように言う。「然則大曆、貞元間、有愈大娘。航船最大、居者養生送死嫁娶悉在其間」（然らば則ち大曆、貞元の間、愈大娘なるもの有り。航船 最も大にして、居る者生を養い死を送り嫁ぎ娶るは悉く其の間に在り）。

なお、白居易の「新樂府五十首・塩商婦」（〇一六二）に、「南北東西不失家、風水為郷船為宅」（南北東西 家を失わず、風水を郷と為し 船を宅と為す）とあり、塩商人が船を自分の家とすることが詠われている。

〔樂風波〕文字通り風や江の波を苦にせず楽しむ。風や波は、船旅には本来危険な好ましくないものであるが、船旅が日常生活となつている賈客にとつてはそれも楽しいものであることを言う。

「風波」は、陳注にも引く李陵「与蘇武三首」其一（『文選』巻二九）に、「風波一失所、各在天一隅」（風波 一に所を失えば、各おの天の一隅に在り）とあり、曹植「精微篇」（『宋書』樂志）に、「畏懼風波起、禱祝祭名川」（風波の起こるを畏懼し、禱祝して名川を祭る）とあるなど、六朝の詩にも多くの用例が見え、風と波は好ましくないものとして詠われている。

唐詩にも多くの用例がある。一例として、李白の「荊州歌」（王琦注本巻四）に、「白帝城辺足風波、瞿塘五月誰敢過」（白帝城辺 風波足り、瞿塘五月 誰か敢えて過ぎらんや）とあるのは、張籍のこの詩と同じく長江の危険な風波。また、同じく李白「姑孰十詠」の「丹陽湖」（同巻二二）に、「湖与元氣連、風波浩難止。天外賈客帰、雲間片帆起」（湖は元氣と連なり、風波浩として止め難し。天外 賈客帰り、雲間 片帆起こる）とあるのは、「賈客」の語も同時に使われる例。

杜甫には二例、うち「夢李白二首」其二（『詳注』巻七）には、「江湖多風波、舟楫恐失墜」（江湖 風波多く、舟楫 失墜するを恐る）とあるのは、夢の中で見た李白の旅の様子を詠う中に見え、やはり旅の危険を象徴する自然現象として風と波が詠われている。張籍にはこの一例のみ。

以上冒頭の二句が一韻でまとまっており、多くの賈客が行き来する場所として金陵から西の長江中流域を出し、彼らの水上生活の様子をおおまかに詠

う。

3・4 欲発移船近江口、船頭祭神各澆酒

〔欲発移船近江口〕出発に際して船を停泊させていた場所から長江の本流近くに移す。徐注及び李樹政注は、船の停泊場所が金陵の秦淮河であるとし、「江口」は秦淮河が長江にそそぎ込む場所を指すとす。

「欲発」は出発しようとする。船の出発に関しては、庾信の「賈客詞」にも、「五両開船頭、長檣發新浦」（五両 船頭に開き、長檣 新浦を發す）と詠われている。

「移船」は船を移動させる。普通に使用されることばのようだが、詩文ともに古い用例は見当たらない。唐詩も初唐には用例が見られず、杜甫「絶句三首」其二（『詳注』巻一四）に、「移船先主廟、洗棗浣花溪」（船を先主廟に移し、棗を浣花溪に洗う）とあるのが最も早い用例。他には張籍と同時代の白居易「琵琶引」（六〇三）に、「移船相近邀相見、添酒迴燈重開宴」（船を移して相近づけ 邀えて相見、酒を添え燈を廻して 重ねて宴を開く）とある。

張籍にはもう一例、466「祭退之」（巻七）に、「移船入南溪、東西縦篙根」（船を移して南溪に入り、東西 篙根を縦にす）とある。

同じ意味の「移舟」であれば、盛唐の頃から多くの用例が見える。一例として、王維「奉和聖製賜史供奉曲江讌應制」（趙注本巻七）に、「對酒山河滿、移舟草樹迴」（酒に対して 山河滿ち、舟を移して 草樹迴る）とある。

〔船頭祭神各澆酒〕船の船先で航海の無事を水神に祈願し、酒を水面に注ぎかける。

「船頭」は船の船先。古い用例が見当たらず、唐以前の詩では前掲庾信の「賈客詞」に、「五両開船頭、長檣發新浦」（五両 船頭に開き、長檣 新浦を發す）とあるのを見るのみ。風見のための旗（五両）を舟の船先で開き、いよいよ出発するのである。

唐詩では盛唐から用例が見え、杜甫に二例、うち「陪諸貴公子丈八溝携妓納涼晚際遇雨二首」其二（『詳注』巻三）に、「雨來霑席上、風急打船頭」（雨來たりて 席上を霑し、風急にして 船頭を打つ）とあるのは、波が船先に打ち付けるといふ例。同時代の王建「宮詞一百首」其二五（『王建詩集』巻一〇）には、「競渡船頭掉綵旗、兩邊濺水濕羅衣」（競いて船頭に渡りて綵旗を掉さし、兩邊の濺水 羅衣を湿す）とあり、宮女の様子を詠うなかに見える。張籍にはこの一例のみ。

「祭神」は旅の安全を祈願して長江の神を祭ること。用例としては古く、陳注にも引く『論語』八佾に、「祭如在、祭神如神在。子曰、吾不与祭、如不祭」(祭ることが在るが如くし、神を祭ることが神在るが如くす。子曰く、吾祭に与らざれば、祭らざるが如し)とある。ただ、これ以外に用例がほとんど無く、文学作品に関しては唐以前の用例が見られない。

唐詩にもほとんど用例がなく、中唐前期の詩人司空曙「送夔州班使君」(『全唐詩』卷二九二)に、「曉橋争市隘、夜鼓祭神多」(曉橋 市を争いて隘く、夜鼓 神を祭ること多し)とあるのは、夔州にある町の祭の様子を詠ったもの。

「各澆酒」は、買客たちがめいめい酒をそそぐ。李樹政注に、旅の安全を水神に祈願する行為であると指摘する。「澆」は播くように広く薄くそそぐ行為であり、水面にふりかけるように注がれたのであろう。

唐以前の詩に用例はなく、唐詩でも中唐の頃から用例が見え始めることばである。盧綸「題伯夷廟」(『全唐詩』卷二七九)に、「落葉滿階塵滿座、不知澆酒為何人」とあるのは、詩題にあるように伯夷の廟前で注がれた酒。また、白居易「青塚」(〇二二二)に、「不見青塚上、行人為澆酒」(見ずや青塚の上、行人 為に酒を澆ぐを)とあるのは、匈奴に嫁いだ悲劇の女性王昭君の墓に酒をそそぐ。いずれも死者の霊を慰める行為である。李賀「神弦」(王琦注『李長吉歌詩彙解』卷四)に、「女巫澆酒雲滿空、玉爐炭火香鑿鑿」(女巫 酒を澆げば 雲 空に満ち、玉爐の炭火 香 鑿鑿たり)とあるのは、巫女が神を迎える儀式を詠ずる詩の冒頭に見え、張籍のこの詩と類似した用例である。

なお、劉禹錫「買客詞」に、「徼福禱波神、施財遊化城」(福を徼めて 波神に禱り、財を施して 化城に遊ぶ)とあり、張籍のこのこと同様に、航行中の安全を祈願して波神に祈る商人の行為が詠われている。

以上二句で一韻となっており、買客の乗った船が発する直前の様子を描写する。

5・6 停杯共説遠行期、入蜀經蠻誰別離

「停杯共説遠行期」杯を置いて遠い旅路の計画を語り合う。「杯(盃)」は、4句で長江の水神を祭るために水中に注いだ際用いた杯であろう。

「停杯」について、唐以前の詩に用例が少なく、魏の武帝・曹丕「秋胡行」(『類聚』卷四二)に、「嘉肴不嘗、旨酒停盃」(嘉肴は嘗めず、旨酒は盃を停む)の他、三例を数えるのみである。

唐詩では初唐から用例が見える。褚亮「晚別学記室彦」(『全唐詩』卷三二二)に、「挙袂慘將別、停杯恨不怡」(袂を挙げて慘として將に別れんとし、杯を停めて恨として怡ばず)とあり、陳注引く李白「把酒問月」(王琦注本卷二〇)にも、「青天有月來幾時、我今停杯一問之」(青天 月有りてより來幾時ぞ、我今 杯を停めて一たび之に問う)とある。

杜甫には用例がなく、張籍にもこの一例があるのみ。「遠行」は古くから用例があることば。『孟子』公孫丑下に、「當在宋也、予將有遠行。行者必以贖」(宋に在るに当たりては、予 將に遠行有らんとす。行者には 必ず以て贖す)とある。

唐以前の詩にも多くの用例があり、「古詩十九首」其三(『文選』卷二九)にも、「人生天地間、忽如遠行客」(人生 天地の間、忽として 遠行の客の如し)と有名な句があり、魏の武帝「苦寒行」(『文選』卷二七)には、「延頸長歎息、遠行多所懷」(頸を延べて 長く歎息し、遠行して 懷う所多し)とある。

唐詩にも用例が多い。李白の同題樂府に「海客乘天風、將船遠行役」(海客 天風に乗り、船を將て遠く行役す)とあるのは「遠行役」として見える。また、同じ李白が南京の長干里に住む商人の妻を主人公にした「長干行二首」其一(王琦注本卷四)には、「十六君遠行、瞿塘濤預堆」(十六 君 遠行す、瞿塘 濤預堆)とあり、遠く長江を遡って行商に出かける夫の行き先として長江中流域の瞿塘峽が詠われている。

杜甫にも五例、一例として「送遠」(『詳注』卷八)に、「帶甲滿天地、胡為君遠行」(帶甲 天地に滿つ、胡為れぞ 君 遠行する)とある。張籍にもこの他二例、275「送遠客」(卷五)に、「憔悴遠行客、殷勤欲別杯」(憔悴す 遠行の客、殷勤 杯に別れんと欲す)とあり、前掲423「春江曲」(卷七)にも、「長干夫婿愛遠行、自染春衣縫已成」(長干の夫婿 遠行を愛し、自ら春衣を染めて 縫已に成る)とある。金陵の長干里に住む商人の妻の歌であり、夫が遠い旅に出てばかりいることを「遠行を愛す」と表現している。

「入蜀經蠻」西方の蜀の地に行く者もいれば、南方の蠻の地を経過する者もいる。旅程を話す買客の行き先として蜀と南方の地が詠われている。

蜀は今の四川省辺り、唐代の劍南道を指す。金陵を起点にすれば、長江をはるかに遡ったその上流域にある。蠻は今の中国南方一体の地域を指すことばで、唐代の嶺南道がそれに当たる。言葉としては、古く『礼記』王制(李樹政・李冬生注に引く)に、「南方曰蠻」(南方を蠻と曰う)とある。

「入蜀」は散文のなかで普通に使われることば。唐詩の用例も多く、杜甫

に詩題を含めて三例、うち「三絶句」其二(『詳注』卷一四)には、「二十一
家同入蜀、惟残一人出駱谷」(二十一) 同に蜀に入るも、惟だ一人の駱谷
を出づるを残すのみ」とあり、戦災から蜀に逃れてきたことを「蜀に入る」
と表現する。「経蛮」は、唐詩の詩句に張籍のこゝ以外に用例がない。

賈客たちの商業活動については、元稹の同題楽府に「求珠駕滄海、採玉上
荆衡。北買党項馬、西擒吐蕃鷄。炎洲布火浣、蜀地錦織成」(珠を求めて
滄海に駕し、玉を採りて 荆衡に上る。北のかた 党項の馬を買い、西のか
た 吐蕃の鷄を擒る。炎洲 布は火もて浣い、蜀地 錦は織りて成る)とあ
り、賈客が各地の宝石や動物、特産品などを買い求めて中国全土を駆け巡る
様子が詠われており、そのなかに蜀と炎洲が出てきている。炎洲は海南の地
であり、張籍の詩に言う「蛮」の地に相当するであろう。

「誰別離」誰が別れることがあるか。同じ目的地に向かう賈客が行動をと
もにすることをこのように表現しているのである。また、いったんは旅先
の遠いから別れることはあっても、長江流域を中心に船で旅を続けるからに
は、いつかどこかの港で再会することになる。そのことを言うのであろうか。
ここでは前者の意味で解釈した。

賈客の仲間意識の強さは、3・4句に一緒に水神に祈願したり、5句にあ
るように旅先のことを語りあったり、7句に集団を意味する「衆中」の語が
あること、さらには12句「前侶(前を行く行商仲間)に及ぶ」と、賈客が同
じ行商仲間を意識して旅をしていることからわかる。この「誰別離」は反語
で読み、「別れることはない」の意味で解釈をした。

賈客の仲間意識の強さは、陳の後主の同題楽府に「三江結儔侶、万里不辭遙」
(三江に儔侶を結び、万里 遙かなるを辞せず)とあり、元稹の同題楽府に
も、「自茲相將去、誓死意不更」(茲より相將いて去れば、死するも 意
更わらざるを誓う)とある。前者では、仲間となつて万里の彼方まで行動を
ともにすると詠い、後者はいったん一緒に行動することになれば、死んでも
心を変えないと詠っている。

「別離」は古くから詩文で常用の語。張籍にも用例が十五例あり、14「別
離曲」(卷一)に、「早知今日当別離、成君家計良為誰」(早に今日 当に別
離すべきを知らば、君が家計を成すこと 良に誰が為ならん)とあった。そ
の【語釈】及び【題解】を参照。なお、「誰別離」三字の並びでは、同時代
で韓門の孟郊「同年春譙」(『孟郊詩集校注』卷五)に、「浮跡自聚散、壯心
誰別離」(浮跡 自ずから聚散するも、壯心 誰か別離せん)とある。集ま
ったと思つたらまた別れることになるが、互いの心はつながったままである
と同年の進士同士の結束のかたさを詠う。ここでは反語で用いられているよ

うだ。

「誰」を『楽府詩集』は「遠」に作り、『全唐詩』注も「一作遠」と指摘
する。その場合は「遠く別離す」(遠く離ればなれになる)となるが、5句
に「遠行」とすぐ近くに「遠」字が用いられているため、ここでは「誰」の
方がよいであろう。また、四庫本は「難」に作り、「別離し難し」(別れるの
がづらい)となる。これでも意味は通じるが、他のテキストに同様に作るも
のがないことから、字体の類似による転写の誤りであると思われる。

以上この二句は、意味の上からは前の二句に引き続いて旅に出発する際の
様子を詠う。それぞれの目的地によつて船団を組み、仲間とともに旅を続
ける賈客の行動を詠う。

7・8 金多衆中為上客、夜夜算縉眠独遅

「金多衆中為上客」いっしょに旅をする賈客のなかで一番の金持ちを「上客」
という。

「上客」は、普通宴席の主賓を指す。張籍21「謙客詞」(卷一)に、「上客
不用顧金羈、主人有酒君莫違」(上客 金羈を顧みるを用いざれ、主人 酒
有り 君 違ふこと莫かれ)と見えた。用例についてはその【語釈】を参照。
ただ、この詩に言うような「上客」の使い方は未見。当時の商人の生活を知
る貴重な資料であると言えよう。

「夜夜算縉眠独遅」夜な夜なお金を数えて、一人夜更かしをする。

「夜夜」は毎晩。唐以前の詩に多くの用例がある。漢代の作とされる「古
詩為焦仲卿妻作」(『玉臺新詠』卷一)に、「鷄鳴入機織、夜夜不得息」(鷄鳴
に機織に入り、夜夜 息うを得ず)とあり、陶淵明「飲酒詩二十首」其四(『陶
淵明集校箋』卷三)に、「徘徊無定止、夜夜声轉悲」(徘徊 定止する無く、
夜夜 声 転た悲し)とある。後者は毎夜鳥が悲しい鳴き声を上げることがを
詠うなかに見える。

唐詩にも初唐から多くの用例が見え、杜甫にも一例、「西閣三度期大昌嚴
明府同宿不到」(『詳注』卷一七)に、「匣琴虛夜夜、手板自明朝」(匣琴 虚
しく夜夜、手板 自ずから明朝)とある。毎晩琴は入れ物にしまわれたまま
と、嚴明府に会えない自分を演奏されない琴に準えている。

張籍にこの他一例、254「贈王侍御」(卷四)に、「上陽春晚蕭蕭雨、洛水寒
來夜夜声」(上陽 春は晩る 蕭蕭の雨、洛水 寒は來たる 夜夜の声)と
ある。

「算緡」はお金を数える。「緡」は穴の空いた銭を貫く細い繩のことで、ここでは緡銭そのものを指す。

徐注や李冬生注に引くように、「算緡銭」の語が『漢書』武帝紀の元狩四年の記事に次のように見える。「四年冬、有司言關東貧民徙隴西・北地・西河・上郡・会稽凡七十二万五千口。県官衣食振業、用度不足、請收銀錫造白金及皮幣以足用。初算緡銭」(四年冬、有司言關東の貧民 隴西・北地・西河・上郡・会稽に徙ること凡そ七十二万五千口。県官 衣食もて業を振うも、用度 足らず。請う 銀錫を取めて白金を造り皮幣に及んで以て用に足さんことを、と。初めて緡銭を算う)。難民救済の措置として、白金を造つたり皮でお札を造つたりして経費に充て、さらに緡銭を数えて税を課したと記される。李斐の注に、繩に通された緡銭一貫は千銭であり、一貫で二十銭を税として徴収したと説明する。

唐詩の用例がここを含めて三例、陳注も引く杜甫「奉和嚴中丞西城晚眺十韻」(『詳注』卷一一)に、「帝念深分閫、軍須遠算緡」(帝念 分閫に深く、軍須 算緡を遠ざく)とあるのは、軍需のための課税はしないという意味で使われている。つまり、杜詩の場合、税を徴収するために所得を計算することを「算緡」と表現している。もう一例は、同時代の元稹の「貶江陵途中寄樂天杓直、以員外郎判塩鉄樂天以拾遺在翰林」(『元稹集』卷一七)であり、江陵に左遷される途中に友人の白居易と李建に寄せたこの詩のなかに、「算緡草詔終須解、不敢將心遠羨君」(緡を算え詔を草するは 終に須く、解くべし敢えて心を將て遠く君を羨まず)と見える。李建(杓直)が塩鉄判官であり、塩鉄税の徴収が仕事であったことで「算緡」と言っている。

劉禹錫の「賈客詞」に、賈客の食欲さを詠って「趨時鷺鳥思、藏鏹盤龍形」(時に趨るは 鷺鳥の思、鏹を藏するは 盤龍の形)とあり、下句は賈客が隠し持っている緡銭(鏹)が、まるで龍がとぐるを巻いた形のようにであると表現している。なお、四部本、静嘉堂本、百名家全集本は「算」(「算」の本字)に作る。

この二句は、行動をとにもする賈客のうちの一の金持ちの行動を詠う。5〜8句の四句が一韻となっており、同じ目的地に向かう賈客が行動をとにもすることを詠っている。

9・10 秋江初月猩猩語、孤帆夜發瀟湘渚

〔秋江〕秋の長江。張籍23「採蓮曲」(卷一)に、「秋江岸邊蓮子多、採蓮女兒凭船歌」(秋江の岸邊 蓮子多く、採蓮の女兒 船に凭りて歌う)とあつ

た。その【語釈】を参照。

〔初月〕新月。三日月。

唐以前の詩では東晋の頃から用例があり、民歌である「子夜四時歌七十五首」春歌二十首其五(『樂府詩集』卷四四)に、「碧樓冥初月、羅綺垂新風」(碧樓 初月に冥く、羅綺 新風に垂る)とあり、謝靈運「登永嘉綠嶂山詩」(『古詩紀』卷五七)に、「眷西謂初月、顧東疑落日」(西を眷みては初月か 謂い、東を顧みては落日かと疑う)とある。

唐詩では初唐から用例があり、盧照隣「長安古意」(『全唐詩』卷四一)に、「片片行雲著蟬鬢、織織初月上鴉黃」(片片たる行雲 蟬鬢に著き、織織たる初月 鴉黄に上る)とあるのは、月そのものではなく女性の細く美しい眉を三日月に準えた名句として知られる。

杜甫には二例、一つは詩題「初月」(『詳注』卷七)であり、もう一例の「成都府」(『詳注』卷九)には「初月出不高、衆星尚爭光」(初月 出でて高からず、衆星 尚お光を争う)と詠われている。張籍にはこの一例のみ。

〔猩猩語〕猩猩が人語を話す。猩猩はサルに似た動物で、人面によく言葉を話すという。

古く『礼記』曲礼上に、「鸚鵡能言、不離飛鳥。猩猩能言、不離禽獸」(鸚鵡は能く言うも、飛鳥を離れず。猩猩は能く言うも、禽獸を離れず)とあり、『山海經』海内經に、「有青獸、人面。名曰猩猩」(青獸有り、人面。名づけて猩猩と曰う)とある。

文学作品では、左思「蜀都賦」(『文選』卷四)に、「白雉朝雒、猩猩夜啼」(白雉 朝に雒に雒き、猩猩 夜に啼く)とあり、蜀の地に棲息する変わった生き物を記す中に見える。劉逵注には「猩猩生交趾封溪、似猿、人面、能言語、夜聞其声、如小兒啼」(猩猩 交趾の封溪に生じ、猿に似、人面、能く言語し、夜 其の声を聞けば、小兒の啼くが如し)とその特徴が説明される。詩では、梁の江淹「雜體詩三十首」擬「謝臨川(遊山)靈運」詩(『文選』卷三二)に、「夜聞猩猩啼、朝見鼯鼠逝」(夜に猩猩の啼くを聞き、朝に鼯鼠の逝くを見る)とあるのが唐以前の詩の用例は唯一の例。張籍と同じく夜に啼く猩猩が詠われている。

唐詩では、盛唐の李白に二例見えるのが最初で、その後中唐になって多く詩に詠われるようになる。李白「遠別離」(王琦注本卷三)に、「日慘慘分雲冥冥、猩猩啼烟兮鬼嘯雨」(日慘慘として雲冥冥たり、猩猩 烟に啼き 鬼は雨に嘯く)とあり、「清溪行」(王琦注本卷八)に、「向晚猩猩啼、空悲遠遊子」(晩に 向として猩猩啼き、空しく遠遊の子を悲しましむ)とある。前

者は詩の冒頭に「遠別離、古有皇英之二女。乃在洞庭之南、瀟湘之浦」(遠別離、古え皇英の二女有り。乃ち洞庭の南、瀟湘の浦に在り)とあり、詩の舞台が張籍の詩にも登場する瀟湘の地(洞庭湖南)である。後者は旅人(遠遊子)に望郷の念を起こさせるものとして猩猩の啼き声が詠われている。

中唐の例を一つ挙げれば、盧全「寄蕭二十三慶中」(『全唐詩』卷三八八)に、「千災万怪天南道、猩猩鸚鵡皆人言」(千災万怪 天南の道、猩猩鸚鵡皆人のごとく言う)とある。この他、韓愈、白居易、元稹、李賀にも用例が見える。

杜甫には用例がない。張籍にはこの他に一例、285「送蜀客」(卷六)に、「山橋日晚行人少、時見猩猩樹上啼」(山橋 日晚れて 行人少なく、時に見る 猩猩の樹上に啼くを)とあるのは、この詩と同じく旅の途中に経験する風景として猩猩の啼き声が詠われている。

〔孤帆〕一艘の帆掛け船。

古い用例のない言葉。唐以前の詩に一例、梁の朱超「別席中兵詩」(『類聚』卷二九。ただし「朱超道」作とする)に、「扁舟已入浪、孤帆漸逼天」(扁舟已に浪に入り、孤帆 漸く天に逼る)とあるのを見るのみ。

唐詩では初唐から用例が見え、陳子昂「白帝城懷古」(『全唐詩』卷八四)に、「古木生雲際、孤帆出霧中」(古木 雲際に生じ、孤帆 霧中より出づ)とあり、詩題からわかるように白帝城(夔州)のある長江中流域を進む帆船を詠じている。また、李白「黃鶴樓送孟浩然之広陵」(王琦注本卷二)に、「孤帆遠影碧山尽、唯見長江天際流」(孤帆の遠影 碧山に尽き、唯だ見る 長江の天際に流るるを)とあるのは、人口に膾炙した例。

杜甫には三例、うち「夜」(『詳注』卷一七)に、「疏燈自照孤帆宿、新月猶懸双杵鳴」(疏燈 自ら照らして孤帆宿し、新月 猶お懸かりて 双杵鳴る)とあるのは、張籍と同じく新月(初月)とともに孤帆が詠われた例。張籍にはもう一例、56「送越客」(卷二)に、「見説孤帆去、東南到会稽」(見説 孤帆去りて、東南して会稽に到ると)とある。

〔瀟湘渚〕瀟水や湘水の渚。「瀟湘」は洞庭湖南、湘江の流域を広く指すことば。風光明媚な場所であると同時に『楚辞』の舞台として哀切なイメージを伴う(松浦友久編『漢詩の辞典』四六六頁参照。大修館書店、一九九九年)。

曹植「雜詩五首」其五(『玉臺新詠』卷二)に、「朝遊江北岸、夕宿瀟湘沚」(朝に江北の岸に遊び、夕べに瀟湘の沚に宿る)とある。「沚」は「渚」に同じく水辺。曹植の詩は、『藝文類聚』卷二六に阮籍「詠懷詩」のなかの一

首として掲載され、そこでは「朝遊江北岸、夕宿瀟湘沚」となっている。陳注に引く沈約「夕行聞夜鶴」(『玉臺新詠』卷九)に、「自此別故群、獨向瀟湘渚」(此れより故群と別れ、獨り瀟湘の渚に向かう)とあるのは、三字の並びが張籍の詩と同じである。

唐詩では初唐から用例が見え、盧照隣「明月引」(『全唐詩』卷四一)に、「荆南兮趙北、碣石兮瀟湘」(荆南と趙北と、碣石と瀟湘と)とあり、明月の光が万里に渡って注がれると詠うなかに「瀟湘」の語が見える。先に見た李白「遠別離」の冒頭に、「遠別離、古有皇英之二女。乃在洞庭之南、瀟湘之浦」(遠別離、古え皇英の二女有り。乃ち洞庭の南、瀟湘の浦に在り)とあることは指摘した通りである。さらに、中唐前期の劉長卿「岳陽館中望洞庭湖」(『全唐詩』卷一四七)に、「孤舟有歸客、早晚達瀟湘」(孤舟に歸客有り、早晚 瀟湘に達せん)とあるのは「孤舟」と一緒に詠われている例である。

杜甫にも用例が多く、全部で十五例ある。うち、「去蜀」(『詳注』卷一四)に、「如何関塞阻、転作瀟湘游」(如何せん 関塞阻まれ、転じて瀟湘の游を作さんことを)とあるのは、詩題にある通り、蜀の地を離れた杜甫が長江を下って湘水までやってくることを詠う。張籍にはこの他三例、一例として「湖南曲」(卷七)に、「瀟湘多別離、風起芙蓉洲」(瀟湘 別離多く、風は芙蓉の洲に起く)とある。

なお、『樂府詩集』は「瀟(瀟)湘」に作る。字体の類似による誤りであろう。

以上この二句は、「孤帆」とあるように、なんらかの事情で仲間と離ればなれになった賈客が、一人寂しく旅を続けるなか、先を行く仲間を追いかけて、夜、危険を顧みずに船をこぎ出すことを詠う。

11・12 水工持楫防暗灘、直過山辺及前侶
〔水工〕水夫。船上で楫を操る人を指す。

陳注引く『史記』河渠書に、「而韓聞秦之好興事、欲罷之毋令東伐、乃使水工鄭国間説秦、令鑿涇水、自中山西邸瓠口為渠」(而して韓 秦の好んで事を興すを聞き、之を罷らして東伐せしむること母からんと欲し、乃ち水工鄭国をして間して秦に説かしめ、令涇水を鑿り、中山の西より瓠口に邸るまで渠を為らしむ)とあるのは、鄭の国が治水工事を得意とすることを「水工鄭国」と記している。『史記』にはこの他にも二例「水工」の語が見えるが、いずれも治水工事をする人を指しているようだ。

唐以前の詩に用例はない。唐詩の用例もここを含めて三例、詩句に使われた例としては張籍が最も早い。参考までに張籍以後の例を挙げると、晩唐の曹唐「南遊」(『全唐詩』卷六四〇)に、「尽興南遊卒未迴、水工舟子不須催」(興を尽くして南遊し、卒に未だ迴らず、水工舟子 催すを須いざれ)とあり、張籍と同じく船上で作業をする人を指しているようである。

〔暗灘〕夜の早瀬。周りが暗い上に、浅瀬で岩が多い場所のため、舟が進むのには危険な場所である。

散文も含めて唐以前に用例がない。唐詩でもここを含めて二例、張籍と同時代の李紳「趨翰苑遭誣搆四十六韻」(『全唐詩』卷四八〇)に、「暗灘朝不怒、驚瀨夜無虞」(暗灘 朝に怒らず、驚瀨 夜に虞り無し)とあるのみである。

〔山辺〕山のそば。山の端が長江に入り込んで、長江が屈曲している箇所を言うのであろう。

普通に使われることばのようであるが、唐以前の詩にはほとんど用例がなく、陳の劉勰「侯司空第山園詠妓詩」(『類聚』卷四二)に、「山辺歌落日、池上舞前溪」(山辺に落日を歌い、池上に前溪を舞う)とあるのを見るのみ。妓女が山の近くや池のほとりで歌ったり舞ったりする様子を詠じている。すでに張籍11「送遠曲」(卷一)に、「戲馬臺南山簇簇、山辺飲酒歌別曲」(戲馬臺の南 山簇簇たり、山辺に酒を飲みて 別れの曲を歌う)と見えた。その【語釈】も参照。

〔前侶〕先に行く友。ここでは同じ旅商人の仲間を指す。

唐以前の詩文にほとんど用例がない。詩の用例はわずかに三例、最も早いのは劉宋の吳邁遠「飛來双白鵠」(『玉臺新詠』卷四)に、「豈不慕前侶、為爾不及群」(豈に前侶を慕わざらんや、爾が為に群に及ばず)とある。ここでは二羽の白鳥(白鵠)の前を飛ぶ白鳥の群を指しており、張籍の詩と同じく「及」の字が使われている。陳注は江淹「雜體詩三十首」「謝法曹(贈別)惠連」(『文選』卷三二)に、「解纜候前侶、還望方鬱陶」(纜を解いて 前侶を候ち、還り望んで 方に鬱陶たり)とあるのを引いている。船旅をする人にとつての前方を進んでいる友を言い、張籍のこのこと類似する。

唐詩では、初唐の張說「酬崔光祿冬日述懷贈答」(『全唐詩』卷八八)に、「夫君邁前侶、觀國馳奇姿」(夫の君 前侶に邁ぎ、國を觀て 奇姿を馳す)とある他、王維の「輞川集二十首」の「木蘭柴」(趙注本卷二三)に、「秋山斂餘照、飛鳥逐前侶」(秋山 餘照を斂め、飛鳥 前侶を逐う)などある。

三字の並びでは、錢起「藍田溪雜詠二十二首」の「田鶴」(『全唐詩』卷二二九)に、「單飛後片雪、早晚及前侶」(單り飛んで 片雪に後れ、早晚 前侶に及ぶ)とある。これは吳邁遠の詩と同様、鶴の仲間を指す。

以上この二句は、一緒に旅を続けていた仲間に遅れを取った買客が、仲間に追いつくために危険な夜の江を船で進む様子を詠う。

9-12句が一韻となっており、仲間と行動をともしてきた買客が、旅の途中に一人になり、仲間を追いかけて先を急ぐ様子を詠っている。

13・14 年年逐利西復東、姓名不在縣籍中

〔年年〕毎年。詩文に常見の語。これまでも3「雜怨」、13「猛虎行」(いずれも卷一)などに見えた。その【語釈】を参照。

〔逐利〕利益を追い求める。

古くから散文の中で使われることばで、「韓非子」詭使に、「損仁逐利、謂之疾」(仁を損し利を逐う、之を疾と謂う)とあり、陳注に引く『史記』平準書に、「而不軌逐利之民、蓄積餘業以稽市物、物踊騰躍」(而して不軌にして利を逐うの民は、餘業を蓄積して以て市物を稽え、物は踊り騰躍す)とある。後者は不法に利益を求める連中のために物価が高騰すると記す。また、平準書の別の箇所には「商賈以幣之變、多積貨逐利」(商賈 幣の變ざるを以て、多く貨を積み利を逐う)とあり、貨幣制度の變更に乗じて商人が利益を追い求めると記す。

詩においては唐以前に用例がない。唐詩でも中唐になって使われ始めるようだ。一例として、韓愈「寄崔二十六立之」(『集釈』卷八)、「朋友日凋謝、存者逐利移」(朋友 日びに凋謝し、存する者も 利を逐いて移る)とある。

〔西復東〕西へ行ったり東へ行ったり。利益があると思えばどこへでも足を運ぶ買客の行動を三字で表す。

唐以前の詩に用例はない。陳注は徐陵の詩句として「今余東復東」を引くが、出典と思しき『藝文類聚』卷五所収の「内園逐涼詩」は「今余東海東」に作る。

唐詩では盛唐から用例が見え始める。王維「愚公谷三首」其一(趙注本卷九)に、「寧問春將夏、誰論西復東」(寧ぞ問わん 春將に夏ならんとするを、誰か論ぜん 西し復た東するを)とあるのは、一箇所に安住しないことをこの三字で表現する。また、劉長卿「避地江東留別淮南使院諸公」(『全唐詩』

卷一五一)に、「長安路絶鳥飛通、万里孤雲西復東」(長安路絶うるも 鳥は飛通し、万里の孤雲 西し復た東す)とあるのは、放浪する我が身を風に翻弄されて漂う雲に喩えている。

杜甫には一例、「白鳧行」(『詳注』卷二三)に、「鱗介腥膻素不食、終日忍饑西復東」(鱗介腥膻にして 素より食らわず、終日饑えを忍んで西し復た東す)とあるのは、食料を求めて鳥が飛び回るさまを言う。張籍にはこの一例のみ。

元稹の同題楽府の冒頭「估客無住着、有利身則行」(估客 住着無く、利有れば 身則ち行く)や、劉禹錫「賈客詞」の冒頭「賈客無定遊、所遊唯利并」(賈客 定遊無く、遊ぶ所は唯だ利のみ并ぶ)とあるのも、張籍のここと同様に利益があるとわかればどこへでも出かけていく旅商人の商魂たくましさやがめつさを詠じている。具体的な方角を示してどこでどのような商品を手にするかについても元稹の詩に見えた。6句「入蜀経蛮」の【語釈】を参照。

「姓名不在県籍中」氏名が県の戸籍簿に掲載されていない。

「姓名」は人の氏名。張籍の2「西州」(卷一)に、「生男不能養、懼身有姓名」(男を生むも 養う能わず、身に姓名有るを懼る)とあったのと同様、名簿に記される氏名。「西州」では徵兵名簿か、あるいは戸籍簿がそのまま徵兵用の名簿にも利用されたのであろう。

用例については「西州」の【語釈】を参照。そこに掲載されたもの以外で用例を挙げると、唐以前の詩句にはほとんど用例が見えない。唐詩では初唐から用例が見える。盧照隣「首春貽京邑文士」(『全唐詩』卷四二)に、「覽鏡改容色、藏書留姓名」(鑑を覽ては容色改まり、書を藏して姓名を留めんとす)とあり、下句は名山に自分の名の記した書物を埋藏して永遠に名を残す行為を詠っており、李白「悲歌行」(王琦注本卷七)に、「劍是一夫用、書能知姓名」(劍は是れ一夫の用にして、書は能く姓名を知る)とあるのは、『史記』項羽本紀に、項羽が叔父の項梁に言った「書足以記名姓而已。劍一人敵、不足学。学万人敵」(書は以て名姓を記すに足るのみ。劍は一人の敵、学ぶに足らず。万人の敵を学ばん)と言った故事に基づいた表現。

杜甫にも二例、「哀王孫」(『詳注』卷四)に、「問之不肖道姓名、但道困苦乞為奴」(之に問うも 肯えて姓名を道わず、但だ道う 困苦す 乞う奴と為らんと)とある。張籍には「賈客樂」「西州」以外に二例、うち206「贈賈島」(卷四)に、「姓名未上登科記、身屈惟忤内史知」(姓名 未だ登科記に上らず、身屈するも惟だ内史の知に忤ずるのみ)とあり、科挙に合格していないことを賈島の氏名が登科記に記されないと詠う。

「県籍」は県の戸籍簿。税を徴収する際に税額を決める基本資料となるものである。詩文を含めて古い用例がない。

史書にはいくつか用例が見える。うち、『隋書』食貨志には、「建徳二年、改軍士為侍官。募百姓充之、除其県籍」(建徳二年、軍士を改めて侍官と為す。百姓を募りて之に充て、其の県籍を除く)とある。徵兵されることで農夫として県に収める納税義務を免除されることを言うのであろう。

唐以前の詩に用例はない。唐詩でも張籍以後の詩に一例を数えるのみ。晩唐の方干「登新城原桑柘祠」(『全唐詩』卷六五〇)に、「不知県籍添新戸、但見川原桑柘稠」(知らず 県籍に新戸を添うるを、但だ見る 川原に桑柘の稠るを)とあり、人口が増えたために農耕地が増えているのだろうか。眺望の風景を詠うなかに「県籍」が見える。詩を送る県令の蔡明府の善政を称えるなかの二句。

納税の義務から賈客が解放されていることは、白居易や元稹の諷諭詩にも詠われている。前掲白居易「塩商婦」(〇一六二)には、「婿作塩商十五年、不属州県属天子」(婿は塩商と作りて十五年、州県に属せず天子に属す)とあり、塩商人が州や県の管轄ではなく天子の直轄であることで納税を逃れていること、元稹の「估客樂」にも、「小兒販塩鹵、不入州県征」(小兒は塩鹵を販し、州県の征に入らず)と、賈客の次男が塩商で、そのため州県の徵税の対象になつていないことを詠う。さらに、劉禹錫「賈客詞」にも、「行止皆有樂、関梁自無征」(行止 皆樂有り、關梁 自ら征無し)と、賈客が船の通行税の支払いを免除されていることを共通して詠ずる。劉詩の賈客もその序文に「五方之賈、以財相雄。而塩賈尤熾」(五方の賈、財を以て相雄し。而るに塩賈 尤も熾なり)とあることから、白詩や元詩と同じく塩商であることがわかる。

以上この二句は、利益を求め各地を旅する賈客の名前が、県の戸籍簿に記載されていないと詠うことで、その収入の多さにも関わらず納税の義務を逃れていることを暗に言い、最後の二句、重税に苦しむ農夫と対比する。

15・16 農夫税多長辛苦、棄業寧為販宝翁
 「農夫」農民。百姓。

古く『毛詩』を初めとして経書にすでに用例が見えることば。『毛詩』幽月「七月」に、「采荼薪樗、食我農夫」(茶を采り樗を薪にし、我が農夫を食う)とあり、小雅「甫田」にも、豊作を詠って「黍稷稻粱、農夫之慶」(黍稷 稻粱は、農夫の慶)とある。

このように早くから詩のなかに見えた言葉だが、唐以前の詩ではわずかに三例を数えるのみである。後漢の傅毅「迪志詩」(『後漢書』傅毅伝所引)に、「農夫不忘、越有黍稷」(農夫 怠らざれば、越に黍稷有り)とあり、三国魏の曹植「贈丁儀詩」(『文選』卷二四)に、「黍稷委疇隴、農夫安所獲。在貴多忘賤、為恩誰能博」(黍稷 疇隴に委てらる、農夫 安んぞ獲る所あらん。貴に在りては多く賤を忘れ、恩を為すこと誰か能く博からん)とある。後者は貧しい農村と貴人を対比して詠じている。もう一例、陶淵明「勸農」(『箋校』卷一)に、「桑婦宵興、農夫野宿」(桑婦は宵に興き、農夫は野に宿す)とあるのは、桑積みをする女性と対比して詠われている。劉宋以後の用例は見られない。貴族社会においては、曹植が懸念しているように農民に対して目が向けられず、そのことが詩中で農夫が登場しないことと関係しているのであらうか。

唐詩では、盛唐から用例が見え始める。初唐の詩に見えないのは、やはり初唐がまだ貴族社会であるからかもしれない。盛唐の王維「丁字田家有贈」(趙注本卷三)に、「農夫行餉田、閨婦起縫素」(農夫は行きて田に餉し、閨婦は起きて素を縫う)とあり、儲光羲「晚霽中園喜赦作」(『全唐詩』卷一三七)に、「落日燒霞明、農夫知雨止」(落日 霞を焼いて明かに、農夫 雨の止むを知る)とある。

張籍の詩と同じく、重税に苦悩する農夫を詠じた詩としては、高適「自淇涉黄河途中作十三首」其九(『全唐詩』卷二二二)に、「試共野人言、深覺農夫苦。去秋雖薄熟、今夏猶未雨。耕耘日勤勞、租稅兼寫鹵」(試みに共に野人と言え、深く農夫の苦しみを覚ゆ。去秋 薄か熟れたりと雖も、今夏 猶お未だ雨ふらず。耕耘 日に勤勞し、租稅 薄か熟れたりと雖も、今夏 照りて苦しむ農夫が詠われている)とあり、日

杜甫に一例、「秋雨嘆三首」其三(『詳注』卷三)に、「禾頭生耳黍穗黑、農夫田父無消息」(禾頭 耳を生じて 黍穗黒く、農夫田父 消息無し)とあるのは、秋雨の被害に遭い所在の分からなくなった農夫を詠じている。

張籍にこの他にも一例、440「洛陽行」(卷七)、「御門空鎖五十年、稅彼農夫修玉殿」(御門空しく鎖ざす 五十年、彼の農夫に稅して 玉殿を修む)とあるのは、かつて莊嚴な姿を誇っていた洛陽の宮城が、農夫の税金によって建築されたと詠う。また、劉禹錫「賈客詞」の末尾にも、「農夫何為者、辛苦事寒耕」(農夫 何為る者ぞ、辛苦して寒耕を事とせり)と、賈客と対比して苦勞して農作業する農夫が詠われており、張籍のこの詩の末尾と極めて類似する。

なお、両者と交遊のあった白居易「新樂府五十首・杜陵叟」(〇一五四)は、序に「傷農夫之困也」(農夫の困しむを傷むなり)とあるように、詩全

体が重税に苦しむ農夫を正面から詠じている。

「税多」税金が高いこと。

古く「商君書」墾令に、「祿厚而税多、食口衆者、敗農者也」(祿厚くして税多く、食口衆き者は、農を敗る者なり)とあるが、文学作品には「税多」「多税」ともに唐以前に古いの用例がない。

唐詩では張籍の二例を数えるのみ。張籍9「野老歌」(卷一)に、「老翁家貧在山住、耕種山田三四畝。苗疎税多不得食、輸入官倉化為土」(老翁家貧しくして 山に在りて住み、耕種す 山田 三四畝。苗疎らに税多くして 食らうを得ず、官倉に輸入して 化して土と為る)とあった。

言葉の用例ではないが、重税に苦しむ人々を詠じた詩は張籍以前にもある。なかでも杜甫「兵車行」(『詳注』卷二)には、「県官急索租、租稅從何出」(県官 急に租を索むるも、租稅 何くより出でん)と、県の役人が税の徴収にやってくることを詠じている。また、同時代の白居易には、先にも挙げた「新樂府五十首・杜陵叟」(〇一五四)の他、「秦中吟十首・重賦」(〇〇七六)があり、重税に苦しむ人々を詠じている。

「辛苦」苦勞する。「苦辛」でも意味は同じ。

古くから多くの用例がある。「春秋」襄公九年の「左伝」に、「其民人不獲享其土利、夫婦辛苦墊隘、無所底告」(其の民人をして其の土の利を享くることを獲ず、夫婦をして辛苦墊隘して、底り告ぐる所無からしむ)とある。詩の用例は後漢の頃から見える。「長苦辛」の用例として「古詩十九首」其四(『文選』卷二九)に、「無為守窮賤、轉軻長苦辛」(為す無かれ 窮賤を守り、轉軻して 長く苦辛するを)とあるのは、不遇であることを悩んで苦しむことを言い、張籍の詩と同じく「長」字と一緒に使われている。

唐詩の用例も多く、「長」を上につけた例を挙げれば、崔顥「江畔老人愁」(『全唐詩』卷一三〇)に、「雖然得歸到鄉土、零丁貧賤長辛苦」(然りと雖も歸りて郷土に到るを得て、零丁して貧賤 長に辛苦す)とあり、李白「江夏贈韋南陵冰」(王琦注本卷一一)に、「人悶還心悶、苦辛長苦辛」(人悶 還た心悶、苦辛 長に苦辛)とある。

「辛苦」は杜甫にも多くの用例があり、「遭田父泥飲美嚴中丞」(『詳注』卷一一)に、「前日放宮農、辛苦救衰朽」(前日 放たれて農を営み、辛苦して 衰朽を救う)とあり、農事と辛苦が同時に使われている。同時代の白居易「苦熱」(二一八三七)にも、「朝客必煩倦、農夫更苦辛」(朝客は 応に煩倦すべし、農夫は 更に苦辛す)とあり、「農夫」の語も見える。

張籍自身にはこの他に五例、そのうち農事と関連したものに、419「江村行」

〔卷七〕に、「一年耕種長辛苦、田熟家家將賽神」（一年の耕種、長に辛苦す、田熟れて 家家 將に神を賽らんとす）とあり、「長」字と一緒に詠われている。

〔棄業寧為販宝翁〕 棄業をやめていっそのこと宝石売りのじじいになったほうがいい。

「棄業」は仕事を棄てる。ここでは土地を棄てて農業を辞めること。
詩文を含めて古い用例がほとんどなく、管見では三国呉の韋曜「博奕論」〔『文選』卷五二〕に、「今世之人、多不務經術、好翫博奕、廢事棄業、忘寢与食、窮日尽明、繼以脂燭」（今の世の人は、多く経術を務めず、好んで博奕を翫び、事を廢し業を棄て、寢と食とを忘れ、日を窮め明を尽くし、繼ぐに脂燭を以てす）とあるのを見るのみ。博奕に熱中して仕事をおろそかにする愚を述べる。唐詩でも張籍のこの一例のみ。

「販宝」は宝石を販売する。「翁」とあるのは、15句に登場する農夫が、長い間重税に耐えて農業を続けてきた老人であると張籍が想定して詠っているからであろう。唐以前の古い用例がない。唐詩も張籍のこの一例のみ。『樂府詩集』のみが「宝（寶）」を「売（賣）」に作るが、字体の類似による転写の誤りであろう。「宝」で解釈した方が、後述するように張籍の真意を表現している。

買客に宝石を扱う者がいたことは、元稹の同題樂府に「求珠駕滄海、採玉上荆衡」（珠を求めて 滄海に駕し、玉を採りて 荆衡に上る）とあった。また、張籍のこの詩と同じく買客と貧農を対比し、この詩とは逆に貧農の側から詠じた9「野老歌」（卷一）に、「西江買客珠百斛、船中養犬長食肉」（西江の買客 珠 百斛、船中に犬を養いて 長に肉を食らわしむ）とあった。

ここで張籍が、農夫の転職後の仕事として、商人のなかでも宝石商に限定したのは、一つには当時宝石を売買する商人が多くいたということがあるであろう。そしてもう一つは、穀物が人々が生活する上でなくてはならないものであるのに対し、宝石は金持ちの嗜好品であり、庶民にとっては何の価値もないものであるという対比があったのではないか。生活を支える穀物を汗水たらして作るものが重税による（さらには天災などによる）困窮の生活を強いられ、あつてもなくてもいい、ただ売買することで利益を稼ぐ宝石商が楽な生活をするということへの批判があつたものと思われる。

「寧」について、『全唐詩』『樂府詩集』『唐詩品彙』四庫本・静嘉堂本は「長」に作り、「長に販宝の翁と為る」に作る。その場合、重税に耐えかねた農夫がみな宝石商に転職する、ということになる。どちらでも意味は通じるが、「寧」の場合、宝石商になることを願つても、実際には土地を棄て家

業である農業をやめられない。よってこれからも苦しみ続けなければならぬ農夫の言いようのない嘆きを詠っていることになる。「長」でも意味は通じ、その場合15句の「長に辛苦す」の「長」との対応を張籍が意識しているはずであるが、あまり効果は上げていないようだ。今回はテキキストの通り「寧」で解釈した。

なお、転職ではないが、当時豪農が商人を兼業するということが実際にあつたことは、白居易「策林」二三「議塩法之弊」（二〇四〇）の以下に引く記事によつて知ることができる。「臣又見、自閔以東、上農・大賈、易其資産、入為塩商。率皆多藏私財、別營裨販、少出官利、唯求隸名、居無征徭、行無權稅、身則庇於塩籍、利尽入於私室。此乃下有耗於農商、上無益於筭權明矣」（臣又見る、閔より以東、上農・大賈、其の資産を易えて、入りて塩商と為るを。率ね皆多く私財を藏して、別に裨販を営み、官利を出だすこと少なく、唯だ隸名を求め、居に征徭無く、行に權稅無く、身は則ち塩籍に庇きこと明らかなり）。すなわち、函谷関の以東で豪農や富商が塩商に参入し、税金逃れや利益の独占をすることで、農民や商人に損害を与えていると指摘する。豪農が、恐らくは農地を保有したまま十分な資金を活かして塩商人も兼業したのであろう。

以上の四句が一韻となつており、前二句で納税の義務を逃れている買客を詠い、この二句では農夫が重税に苦しんでいることを買客と対比して詠うとともに、農夫のやるせない気持ちや張籍が農夫の立場に立つて詠っている。

【補】

一、張籍「買客樂」の構成

この詩は二句或いは四句で換韻しており、押韻によつて全体を分けると、

- 1・2 買客の生活環境
- 3・4 船出の様子
- 5・8 旅の途上①：仲間との旅
- 9・12 旅の途上②：ひとりでの旅
- 13・16 買客と農夫の対比

5句8句において、5句は3・4句から引き続いて旅に出発する時の賈客の様子を詠じたものであり、時間的にはつながっているが、内容的には9・12句と対比されて、仲間とともに旅を続ける賈客の様子が詠じられている。張籍が換韻したのもそのような構成を意識したものであると考えられる。

二 中唐における賈客批判の楽府の登場

張籍や元稹以前の楽府「賈客楽」は、盛唐の李白に至るまですべて五言四句という同一の形式であり、内容も遠く旅する商人の行動を詠ずるか、残された商人の妻の思いを詠ずるかで共通している。以下、参考として積宝月と李白の詩を挙げる。

積宝月 二首

郎作十里行 郎は十里の行を作し
儂作九里送 儂は九里の送を作す
拔儂頭上釵 儂が頭上の釵を抜いて
與郎資路用 郎に与えて路用を資けん

有信數寄書 信有れば 數しば書を寄せ
無信心相憶 信無ければ 心に相憶う
莫作瓶落井 瓶の井に落つるを作す莫かれ
一去無消息 一たび去りて 消息無し

李白

海客乘天風 海客 天風に乗じ
將船遠行役 船を將つて 遠く行役す
譬如雲中鳥 譬えば雲中の鳥の如し
一去無蹤跡 一たび去りて 蹤跡無し

前者は賈客を夫に持つ女性が夫の帰りを待ち望んだ内容であり、後者はいつたん旅に出れば戻ってくるのではない賈客の生き方を鳥に喩えて詠ったものである。

こうした前代の「賈客楽」を受けて作られた張籍や元稹の「賈(估)客楽」及び劉禹錫「賈客詞」は、賈客批判の意図が間接・直接に出されており、詩の形式も張籍が七言古詩(全一六句)、元稹が五言古詩(全六八句)、劉禹錫

が五言古詩(全二二句)と、前代の作と内容(テーマ)・形式ともに大きく異なっている。そしてそのことが、賈客を詠じた三者の楽府の共通点として最も大きなものであると言えよう。今回は詳しく触れないが、同時代でかつ三者ともに親交のあった白居易の「新樂府五十首」中の一篇「塩商婦」(〇一六二)も、「語釈」で何度か触れたように、塩商人の婦人を詠うことで間接的に塩商その人を批判した諷諭詩であり、張籍や元稹の作と同じ系統に属する作品と見なすことができる。なお、元稹と劉禹錫の詩は、「補」の三に挙げることにする。

前代の楽府との関係で言えば、「題解」で述べたように、「賈客楽」が普通「賈客のうた」の意味で解釈されるのに対し、張籍と元稹の詩は、「賈客の楽しみ」の意味も二重に持たせているようである。張籍の詩では、冒頭の二句「金陵向西賈客多、船中生長樂風波」(金陵の向西 賈客多し、船中に生長して 風波を樂しむ)に「樂」の字が「楽しい」の意味で使われており、3句以降はその風波を樂しむ生活(遠くの旅も仲間がいれば大丈夫。夜の船旅も恐くない。おまけに税金も取られない)が詠われていると解釈することも可能である。元稹の詩でも、65・66句に「生為估客樂、判爾樂一生」(生まれながら估客の樂しみを為し、爾が一生を樂しむに判す)とあるのは明らかに「楽しい」の意味で解釈できる。劉禹錫「賈客詞」に「行止皆有樂、閑梁自無征」(行止 皆樂有り、閑梁 自ら征無し)とあるのは「音樂」「樂しみ」のどちらでも解釈可能であろうが、やはり「樂しみ」の意味ではなからうか。晩唐の劉駕が「反賈客樂」(『全唐詩』卷五八五)という楽府を作り、「無言賈客樂、賈客多無墓。行舟觸風浪、尽入魚腹去」(賈客の樂しみを言う莫かれ、賈客 多く墓無し。行舟 風浪に触れ、尽く魚腹に入り去る)と詠うのは、中唐に張籍や元稹らが賈客批判の詩を集中して作り、賈客の旅の苦勞が詠われなくなつたことへの反動であるが、この劉駕の詩からも張籍や元稹のいう「樂」が「樂しみ」の意味であったと判断できる。ちなみに、劉駕には「賈客詞」もあり、『樂府詩集』の劉禹錫の「賈客詞」の次に掲載されているが、そこでも賈客の旅の苦勞が詠われている。

さて、本題に戻って、中唐においてこうした賈客批判の楽府詩が作られたのは、「語釈」でも紹介した白居易「策林」二三「議塩法之弊」(二〇四〇)に指摘されるように、塩商人を代表とする当時の賈客が私利私欲に走り、国家の税制度に大きな損害を与え、そのことが当時の知識人の共通の認識としてあつたためであると考えられる。元稹の「估客樂」は、こうした賈客の実態を六八句を費やして詳細に記述しているが、では張籍や劉禹錫が、賈客を詠じた詩の末尾に貧窮にあえぐ農民を登場させているのはなぜか。

賈客は一箇所に定住しない生活をするので州や県の戸籍簿に名前が登録

されず、そのために租税などを課せられることはない。そのことは張籍の13・14句に詠われていた。また、劉禹錫が「行止皆有樂、閑梁自無征」（行止皆樂有り、閑梁 自ら征無し）と詠うように、租税だけでなく閑税も課せられず、納税に関しては特権的な身分であったことがわかる。

それに対し農民は、自分の土地を所有し、当たり前だがそこで農作物を栽培する生活をしているため、納税の義務から決して逃れられることはない。その点で賈客とは対照的な存在である。

さらに賈客と農民は反比例の関係にあった。劉禹錫が「賈客詞」の序文で「或ひと」の言葉として「賈雄則農傷」（賈雄なれば則ち農傷む）と記すように、商人が儲かれば儲かるほど農民が被害を受けるといっているのである。そのことは、先の白居易「策林」にも指摘されているが、税収の総額が決まっているとすれば、徴収されない税はどこかで穴埋めされなければならず、その徴収先は農民となることは自然であつたろう。張籍や劉禹錫が賈客と対比して農民を登場させたのも、単に賈客と農民が対照的な生活をしているという理由ではなく、賈客が儲かれば儲かるだけ、その分全く関係のない農民が苦しむという不条理な仕組みとなっていたことによるのである。

張籍の9「野老歌」（巻一）については、すでに【語釈】で何度か触れたが、張籍「賈客楽」とは対照的に重税に苦しむ貧農を主人公にした詩であり、詩の末尾に船上でペットの犬に肉を餌として与える宝石商が登場する。徐注や李樹政注は、これが「賈客楽」と同じ手法の作品であることを指摘しているが、張籍「野老歌」については、「張籍詩訳注（五）」（『宇部工業高等専門学校研究報告』第四七号、二〇〇一年）を参照されたい。

三 張籍「賈客楽」の特徴

ここでは張籍「賈客楽」を、元稹の同題楽府、及び劉禹錫の「賈客詞」と比較してその特徴を明らかにしたい。

以下、まず元稹「估客楽」と劉禹錫「賈客詞」の本文と書き下し文を挙げしておく。

元稹「估客楽」（『元稹集』卷二三）

- 1 估客無住着 估客 住着する無く
- 2 有利身則行 利有れば 身則ち行く
- 3 出門求火伴 門を出でて 火伴を求め
- 4 入戸辭父兄 戸に入りて 父兄に辞す

- 5 父兄相教示 父兄 相教示す
- 6 求利莫求名 利を求むるも 名を求むる莫かれ
- 7 求名有所避 名を求むるは 避くる所有り
- 8 求利無不營 利を求めて 営まざる無かれ
- 9 火伴相勒縛 火伴 相勒縛し
- 10 賣假莫賣誠 仮を売るも 誠を売る莫かれ
- 11 交關但交假 交關 但だ仮を交え
- 12 本生得失輕 本生 得失輕し
- 13 自茲相將去 茲より 相將いて去れば
- 14 誓死意不更 死するも 意 更わらざるを誓う
- 15 一解市頭語 一たび市頭の語を解すれば
- 16 便無鄰里情 便ち隣里の情無し
- 17 鑰石打臂釧 鑰石もて 臂釧を打ち
- 18 糯米吹項璽 糯米もて 項璽を吹く
- 19 歸來村中賣 歸來して村中に売り
- 20 敲作金玉聲 敲きて金玉の声を作す
- 21 村中田舍娘 村中 田舍の娘
- 22 貴賤不敢爭 貴賤 敢えて争わず
- 23 所費百錢本 費やす所 百錢本
- 24 已得十倍贏 已に十倍の贏けを得たり
- 25 顏色轉光靜 顏色 轉た光靜し
- 26 飲食亦甘馨 飲食も 亦甘く馨し
- 27 子本頻蕃息 子本 頻りに蕃息し
- 28 貨販日兼并 貨販 日び兼并す
- 29 求珠駕滄海 珠を求めて 滄海に駕し
- 30 採玉上荊衡 玉を採らんとして 荊衡に上る
- 31 北買党項馬 北のかた 党項の馬を買い
- 32 西擒吐蕃鸚 西のかた 吐蕃の鸚を擒る
- 33 炎洲布火浣 炎洲 布 火もて浣い
- 34 蜀地錦織成 蜀地 錦 織りて成る
- 35 越婢脂肉滑 越婢 脂肉滑かにして
- 36 奚僮眉眼明 奚僮 眉眼明かなり
- 37 通算衣食費 衣食の費を通算し
- 38 不計遠近程 遠近の程を計らず
- 39 經遊天下遍 經遊 天下遍く
- 40 却到長安城 却って長安城に到る

- 41 城中東西市 城中 東西の市
- 42 聞客次第迎 客あるを聞きて 次第に迎う
- 43 迎客兼說客 客を迎えて 兼ねて客に説く
- 44 多財爲勢傾 財多くして 勢の傾くを爲すと
- 45 客心本明黠 客の心 本より明黠なるも
- 46 聞語心已驚 語を聞きて 心已に驚く
- 47 先問十常侍 先ず十常侍に問ひ
- 48 次求百公卿 次いで百公卿に求む
- 49 侯家與主第 侯家と主第と
- 50 點綴無不精 点綴 精ならざる無し
- 51 歸來始安坐 歸り來たりて 始めて安坐し
- 52 富與王者勅 富は王者より勅し
- 53 市卒醉肉臭 市卒 醉肉臭い
- 54 縣胥家舍成 県胥 家舍成る
- 55 豈唯絶言語 豈に唯に言語を絶つのみならんや
- 56 奔走極使令 奔走するは 極く使令なり
- 57 大兒販材木 大兒 材木を販い
- 58 巧識梁棟形 巧みに梁棟の形を識る
- 59 小兒販鹽鹵 小兒 塩鹵を販い
- 60 不入州縣征 州県の征に入らず
- 61 一身偃市利 一身 市利に偃し
- 62 突若截海鯨 突くこと 海鯨を截つが若し
- 63 鉤距不敢下 鉤距 敢えて下さず
- 64 下則牙齒橫 下せば則ち牙齒横たう
- 65 生爲估客樂 生まれながら估客の樂しみを爲し
- 66 判爾樂一生 爾が一生を樂しむに判す
- 67 爾又生兩子 爾 又た兩子を生む
- 68 錢刀何歲平 錢刀もて 何れの歳にか平かにせん

劉禹錫「賈客詞」(『箋証』卷二一)

五方之賈以財相雄、而鹽買尤熾。或曰、賈雄則農傷。余感之作是詞。
 五方の賈 財を以て相雄にして、而も塩買 尤も熾んなり。或ひと曰く、
 賈雄なれば則ち農傷む。余 之に感じて是の詞を作る。

- 1 賈客無定遊 賈客 定遊無く
- 2 所遊唯利并 遊ぶ所は 唯だ利のみ并ぶ
- 3 眩俗雜良苦 俗を眩わして 良苦を雜じえ
- 4 乘時取重輕 時に乗じて 重輕を取る
- 5 心計析秋毫 心に計りて 秋毫を析け
- 6 捶鉤伴懸衡 鉤を捶りて 懸衡に伴し
- 7 錐刀既無棄 錐刀も 既に棄つること無く
- 8 轉化日已盈 轉化して 日び已に盈つ
- 9 微福禱波神 福を微めて 波神に禱り
- 10 施財遊化城 財を施して 化城に遊ぶ
- 11 妻約雕金釧 妻は雕金の釧を約め
- 12 女垂貫珠纓 女は貫珠の纓を垂る
- 13 高資比封君 高資 封君に比び
- 14 奇貨通倖卿 奇貨 倖卿に通ず
- 15 趨時鷲鳥思 時に趨るは 鷲鳥の思い
- 16 藏鏹盤龍形 鏹を藏するは 盤龍の形
- 17 大編浮通川 大編 通川に浮かび
- 18 高樓次旗亭 高樓 旗亭に次ぶ
- 19 行止皆有樂 行止 皆樂有り
- 20 關梁自無征 關梁 自ら征無し
- 21 農夫何爲者 農夫 何爲る者ぞ
- 22 辛苦事寒耕 辛苦して 寒耕を事とす

張籍の特徴としてまず指摘できるのは、賈客の細かな生活の様子や心情が詠われていることであろう。例えば、4句に詠われる船旅の安全を祈願して酒を川に注ぐという行為は、劉禹錫の詩にも同様の記載はあるが、それを船の舳先で行うということまでは詠われていない。また、目的地を同じくする賈客のなかで一番のお金持ちを賈客仲間の間で「上客」と呼ぶというのは、当時の賈客の習慣を知る貴重な資料となっているのではなからうか。

また、賈客の仲間意識の強さが詠い込まれているのも張籍の特徴として指摘できる。いくら遠いところであっても、いくら危険な旅程であっても仲間と行動をとるにするとするのは、詩の5・6句や、9・12句にかけて句数を費やして詠われており、張籍の詩の主要な部分を占める。「語釈」でも触れたように、そうした賈客の仲間意識は、陳の後主の同題樂府に最初に詠われており、元稹の詩にも触れられているが、具体的な行為として、多くの句数を費やして詠まれているのは張籍だけである。特に9・12句には、仲間と離

れた後の一人旅の苦勞や心細さが詠われており、元稹や劉禹錫にはない張籍の詩にのみ見られるものである。冒頭から詩を読みすすめてきた読者は、9〜12句に至り、買客に自然に感情移入して読むことになるであろう。

こうした読者の期待は、最後の二句で困窮する農夫が登場することによって見事に裏切られ、この時初めてこの詩が買客の生活を詠じた風俗詩的なものではなく、実は張籍の真意は買客批判にあり、元稹や劉禹錫の詩と同じような諷諭的な作品であったことに気づくのである。そして、そうした目で再度買客の行動を読み返すと、もう一つの意味が浮かび上がってくる。

8句に詠われる深夜まで小銭を勘定する買客の様子を詠じた句は、人が寝静まった後にこそそそ金の勘定をする買客(上客ゆえに金の管理には細かい)のせせこましい行動として目に映る。また、一人旅の寂しさを詠っていると思えば読んでいた9〜12句は、仲間といっしょでないと不安で仕方がない買客の臆病さを詠っているように感じられるのである。

こうした、意味が二重構造となっているのは張籍だけであり、元稹や劉禹錫の詩では最初から買客批判が鮮明に打ち出されている。元稹の詩では田舎の純朴な娘に偽物を高額で買い取らせるそのあくどい商法が直接記されているし(17〜24句)、劉禹錫の詩でも人々を騙して少しでも儲けようとする買客が詠われている(3〜8句)。元稹と劉禹錫の詩には、買客以外の人物も登場し、彼ら彼女らが買客の貪欲さをさらに強調する存在として詠われている。このように、最初から買客批判を鮮明に打ち出すか、それとも最後まで明らかにするか、詩の展開方法において張籍の詩は特徴的である。

最後に張籍の末尾について、類似した特徴を持つ劉禹錫の詩句と比較したい。張籍の末二句と劉禹錫「買客詞」の末二句は、ともに買客とは対照的な困窮する農夫が登場させている点、同一の詩語(農夫・辛苦)を使っている点で共通している。しかしながら、両者を細かく比較すると異なった特徴を見ることが出来る。劉禹錫は「農夫何為者、辛苦事寒耕」(農夫 何為る者ぞ、辛苦して 寒耕を事とす)と、文句も言わずに黙々と働く農民を出すことで買客との違いを際立たせている。それに対し張籍は、「農夫税多長辛苦、棄業寧為販宝翁」(農夫税多くして 長に辛苦し、業を棄て 寧ろ販宝の翁と為らん)とあるように、苦勞に耐えかね、なれるものなら買客のようになりたいと願う農夫の思いが張籍によって代弁されている。【語釈】に白居易の「策林」を挙げて指摘したように、豪農が商人を兼業するということは当時実際にあったようであるが、この詩に詠われる年老いた農夫が全国各地を旅して回る宝石商に今さらなるようなことは現実的に無理であったはずである。そうした決してかなわない夢を抱くところに過酷な生活を強いられている農夫の悲哀が表現されていると言えるのではなからうか。(畑村 学)

32 羈旅行

【題解】

旅のうた。「羈(羈・羈・羈)旅」はたび、他郷に客となることをいう。古く『春秋』莊公二十二年の『左伝』に「羈旅之臣、幸若獲宥、及於寛政、赦其不閑於教訓、而免於罪戾、弛於負擔、君之惠也」(羈旅の臣、幸いに宥さるるを獲て、寛政に及び、其の教訓に閑わざるを赦して、罪戾を免れ、負擔を弛めらるるは、君の恵みなり)といい、『楚辞』宋玉「九弁」に「坎廩兮貧士失職而志不平、廓落兮羈旅而無友生」(坎廩たり 貧士 職を失いて 志平らかならず、廓落たり 羈旅にして 友生無し)というなどの用例が見えることば。前者は陳の混乱を逃れて斉に赴いた敬仲(公子完)が自らを「羈旅の臣」と呼んだ例。移動している場合だけでなく、ある場所にとどまっただけでも、そこが安住の地でなければ「羈旅」と呼ばれることが分かる。

常見のことばで、詩においても、唐以前では王粲の「七哀詩二首」其二(『文選』卷二三)に「羈旅無終極、憂思壯難任」(羈旅 終極無く、憂思 壮にして任え難し)といい、謝靈運の「擬魏太子鄴中集詩八首」其六「應場」(『文選』卷八〇)に「一旦逢世難、淪薄恒羈旅」(一旦 世難に逢い、淪薄して 恒に羈旅す)というなど、多くの用例がある。

唐に入っても朱仲晦の「答王無功問故園」(『全唐詩』卷三八)に「問我故郷事、慰子羈旅色」(我が故郷の事を問い、子が羈旅の色を慰む)といい、常建の「泊舟盱眙」(『全唐詩』卷一四四)に「郷国雲霄外、誰堪羈旅情」(郷国 雲霄の外、誰か堪えん 羈旅の情)というなど、たくさんの用例がある。その中で、杜甫は「遣興三首」其二(『詳註』卷六)に「生涯能幾何、常在羈旅中」(生涯 能く幾何ぞ、常に 羈旅の中に在り)と自らの漂泊の人生をこのことばで表現するなど、唐の詩人の中で最も多い九例に及ぶ用例を残している。張籍には他に、455「臥疾」(卷七)に「羈旅逐人歎、貧賤還自輕」(羈旅 人の歎を逐い、貧賤 還た自ら軽んず)という一例がある。

ただ、楽府題「羈旅行」は以前の例がなく、また詩題の中での用例も以前にはないようだ。『楽府詩集』では卷九五「新樂府辭六」の部分に、孟郊の「長安羈旅行」に続いて収められている。張修蓉『中唐樂府詩研究』では「新題新意」に分類し、行旅の困難と舟車で長旅を続ける苦勞を詳述する詩であると説明する。

もちろん旅を題材にした詩は以前にも多く作られている。それらとの関係や孟郊「長安羈旅行」との比較については、【補】の部分で触れることにす

る。
 なお、李樹政注は詩人が家を離れて長安に赴く途中での経験を詩にしたものであると解釈している。この説に従い、長安到着後すぐに作詩したと解するなら、貞元十四年(798)に科挙受験のために上京した時か、あるいは太常寺太祝になる前の貞元十九(元和元年(803)806)頃に上京した時の作ということになるか。ただ、楽府であるから、張籍の経験が反映されているにしても、あまり張籍の実体験に引きつけ過ぎる必要はないという考え方もできよう。

【本文・書き下し文】

- 1 遠客出門行路難 遠客 門を出づれば 行路難し
- 2 停車斂策在門端 車を止め 策を斂めて 門端に在り
- 3 荒城無人霜滿路 荒城 人無く 霜 路に満ち
- 4 野火烧橋不得度 野火 橋を焼き 度を得ず
- 5 寒兔入窟鳥歸巢 寒兔は窟に入り 鳥は巢に帰り
- 6 僮僕问我誰家去 僮僕 我に問う 誰が家にか去ると
- 7 行尋田頭暝未息 行きて田頭を尋ね 暝くして未だ息わず
- 8 雙轂長轅礙荆棘 双轂 長轅 荆棘に礙げらる
- 9 岡入澗投田家 岡に縁り 澗に入りて 田家に投ずれば
- 10 主人春米爲夜食 主人 米を春き 夜食を爲る
- 11 晨雞喔喔茆屋傍 晨雞 喔喔たり 茆屋の傍
- 12 行人起掃車上霜 行人 起きて掃う 車上の霜
- 13 舊山已別行已遠 旧山 已に別れ 行くこと已に遠く
- 14 身計未成難復返 身計 未だ成らず 復た返り難し
- 15 長安陌上相識稀 長安の陌上 相識稀に
- 16 遙望天門白日晚 遙かに望む 天門 白日の晩るるを
- 17 誰能聽我辛苦行 誰か能く 我が辛苦の行を聴き
- 18 爲向君前歌一聲 爲に 君前に向いて 一声を歌わん

【口語訳】

- 1 遠行の旅人が門を出るが その旅路はとても困難だ
- 2 車を止め ちをしまつて 門のそばでたすむ
- 3 荒れ果てた町に人の姿はなく 霜が道をおおっており
- 4 野火で橋が焼け落ちていて 川を渡ることもできない

- 5 ごごえたウサギはねぐらの穴に入り 鳥も巢に帰っていく
- 6 召使いが私に尋ねる 「今夜は誰の家に行つて泊まるんですか」
- 7 畑の周りを探して歩き 暗くなつても休むこともできない
- 8 二つの車輪と 車の長柄は いばらに邪魔される
- 9 岡に沿い 谷川に入つて探し歩き ようやく農家に泊めてもらう
- 10 主人は米をついて精米し 夜の食事をつくつてくれた
- 11 茅葺きの家のそばで 一番鶏がコッコと鳴き出すと
- 12 旅人は起きて 車に降りた霜を払い 出発する
- 13 故郷の山に別れて 遠い旅の道を歩いてきたが
- 14 まだ生計は立つておらず 帰ることはできない
- 15 たどり着いた長安の大通りには 知り合いはほとんどおらず
- 16 はるか宮中の門に 日が暮れかかるのを眺めている
- 17 だれか 私のこの苦しみの歌を聴いて
- 18 私のために 天子様の前で ひと声歌つてはくれないだろうか

【押韻】

- 難―上平二五寒・端―上平二六桓(同用)
- 路・度―去聲一一暮・去―去聲九御(古詩通押)
- 息・棘・食―入聲二四職
- 傍・下平一一唐・霜―下平一〇陽(同用)
- 遠・返・晚―上聲二〇阮
- 行・下平一二庚・声―下平一四清(同用)

【語釈】

1・2 遠客出門行路難、停車斂策在門端
 「遠客」遠く旅する人。羈旅の例に引いた『楚辞』宋玉「九弁」の後の部分に「去郷離家分徠遠客、超逍遙兮今焉薄」(郷を去り家を離れて 徠りて遠く客たり、超く逍遙して 今焉んぞ薄まらん)という例があるなど、古くから用例のある常見の語。
 唐までの詩においては、孫綽の「秋日」に「山居感時變、遠客興長謔」(山居して 時の変ずるに感じ、遠客 興きて長く謔う)といい、陳の韋鼎の「長安聽百舌詩」(『藝文類聚』卷九二)に「那能对遠客、還作故乡声」(那ぞ能く 遠客に対し、還つて故郷の声を作す)というなどの用例がある。
 唐に入つても、韋承慶の「南行別弟」(『全唐詩』卷四六)に「澹澹長江水、

悠悠遠客情」(澹澹たり 長江の水、悠悠たり 遠客の情)といい、李白の「擬古十二首」其一(王琦注本卷二四)に「瓶冰知冬寒、霜露欺遠客」(瓶氷りて 冬の寒きを知る、霜露 遠客を欺かん)というなどの用例がある。杜甫には七例あり、「立春」(『詳註』卷一八)に「巫峽寒江那對眼、杜陵遠客不勝悲」(巫峽の寒江 那ぞ眼に對せん、杜陵の遠客 悲しみに勝えず)というなど、自らを「遠客」と呼ぶ例がほとんどである。張籍には、他に詩題と詩中に二例ずつがある。そのうち317「感春」(卷六)に、自らを「遠客」と呼んだ「遠客悠悠任病身、謝家池上又逢春」(遠客悠悠として 病身に任す、謝家の池上 又た春に逢う)という例は、『三体詩』に収められて名高い。

〔出門〕門を出る。出發する。ここでは旅立ちをいう。14「別離曲」(卷一)に「行人結束出門去、幾時更踏門前路」(行人結束して 門を出でて去る、幾時か 更に踏む 門前の路)という用例が見えた。その【語釈】参照。ほかに19「各東西」・22「永嘉行」・24「傷歌行」(いずれも卷一)にも見えていた語である。

〔行路難〕ここでは道を進む困難さ、すなわち旅路のつらさをいう。一般には世路の困難を詠ずる樂府題としてよく用いられ、張籍にも6「行路難」(卷一)の作があり、不遇の士を詠じていた。その【題解】も参照。

張籍のように、樂府の曲名ではなく、世路の困難さや旅のつらさの意味で用いた例としては、唐以前では庾信の「擬詠懷詩二十七首」其四(倪璠注本卷三)に「惟彼窮途慟、知余行路難」(彼の窮途に慟くを惟い、余が行路の難きを知る)といい、隋の孫万寿の「別贈詩」(『文苑英華』卷二八六)に「將歸動離恨、弥傷行路難」(將に帰らんとして 離恨動き、弥いよ 行路の難きを傷む)というなどの例がある。

唐に入っても、虚象の「郷試後、自鞏還田家、因謝隣友見過之作」(『全唐詩』卷一二二)に「且問春稅苦、兼陳行路難」(且く 春稅の苦しきを問い、兼ねて行路の難きを陳ぶ)といい、王昌齡の「大梁途中作」(『全唐詩』卷一四一)に「當時每酣醉、不覺行路難」(當時 毎に酣醉し、行路の難きを覺えず)というなどの例がある。

杜甫には詩中に八例の用例があるうち、「宿府」(『詳註』卷一四)に「風塵在苒音書絶、閑塞蕭条行路難」(風塵 苒苒として 音書絶え、閑塞 蕭条として 行路難し)という例では、旅のつらさをこの語で表現する。張籍の他の用例は先に挙げた樂府題の例のみ。

「行路」を『樂府詩集』は「世路」に作るが、徐注は非とする。この詩の

場合は羈旅の様子を詠じているので、「行路」の方がよいであろう。

〔停車〕車をとめる。

陳注は庾信の「春賦」(倪璠注本卷一)に「協律都尉、射雉中郎、停車小苑、連騎長楊」(協律都尉、射雉中郎、車を小苑に停め、騎を長楊に連ぬ)というのを引いている。協律都尉は李延年、射雉中郎は潘岳のことである。文才のあるものが車をとめて春の景色を愛でることを表現した句のようである。

唐までの詩においては、張華の「輕薄篇」(『樂府詩集』卷六七)に「墨翟且停車、展季猶咨嗟」(墨翟すら 且つ車を停め、展季すら 猶お咨嗟せん)といひ、何遜の「贈韋記室黯別」(『古詩紀』卷九三)に「故人儻送別、停車一水東」(故人 儻も送別すれば、車を 一水の東に停む)というなどの例がある。張華の例は、音楽嫌いの墨子でも聞けば車をとめて耳を傾けるだろうと音楽を褒めた表現。

唐に入つて、高嶠の「晦日宴高氏林亭」(『全唐詩』卷七二)に「莫慮能騎馬、投轄自停車」(能く騎馬するを 慮る 莫れ、轄を投じて 自ずから車を停む)といひ、崔顥の「上巳」(『全唐詩』卷一三〇)に「停車須傍水、奏樂要驚塵」(車を停むるには 須く水に傍るべく、樂を奏するには 塵を驚かすを要む)というなどの例が見える。前者は車輪をとめるくさびを投じて客を留めた故事を用いたもの、後者は上巳の日なので水辺に車をとめるよう勧めた表現。

杜甫には用例がなく、張籍にはもう一例。456「贈孟郊」(卷七)に「停車楚城下、顧我不念程」(車を停む 楚城の下、我を顧みて 程を念わず)という例がある。孟郊が旅程を考慮せず自分を訪ねてくれたことを感謝する中に「停車」の語が用いられている。

〔斂策〕むちをおさめる。上の「停車」と同様、進むのをやめることを指す。

李冬生注は、「策」の用例として、『春秋』文公十三年の『左伝』に、「繞朝贈之以策曰、子無謂秦無人、吾謀適不用也」(繞朝 之に贈るに策を以てして曰く、子 秦に人無しと謂う無かれ、吾が謀 適たま用いられざるなり、と)という、士会(随会)が秦から晋に帰る際に秦の繞朝がむちを贈った部分を引き、さらに『礼記』曲礼上に、「君車将駕、則僕執策立於馬前」(君車 將に駕せんとすれば、則ち僕は策を執りて馬前に立つ)と、君の車の出發の際に召使いがむちを持って馬前で待つことをいう部分を引いている。

陳注は、『後漢書』皇甫嵩朱雋傳論に「汝予之戰、歸功朱雋、張角之捷、本之於盧植、收名斂策、而已不有焉」(汝予の戦いには、功を朱雋に歸し、張角の捷には、之を盧植に本づけ、名を収め策を斂めて、己は有らずとす)

というのを引くが、これは「斂策」の用例とはなっているものの、注に「斂策、不論其功」(斂策とは、其の功を論ぜざるなり)というように、自分の策であることを隠すというような意味の例である。

「斂策」の語の詩における例は少なく、唐までの詩においては、隋の虞世基の「初渡江」(『文苑英華』卷一六二)に「斂策暫廻首、掩涕望江浜」(策を斂めて、暫く首を廻らし、涕を掩いて、江浜を望む)という例が一例あるのみであるが、これはこと同じく、むちをおさめて進むのをやめる意味で用いられている。唐詩における用例はこの例のみのようである。

〔門端〕門のそば、かどぐち。

用例の少ないことば。唐以前の詩においては、劉宋の吳邁遠の「長相思」(『玉台新詠』卷四)に、「晨有行路客、依依造門端」(晨に行路の客有り、依依として、門端に造る)と、門前に來客があつたことを表現する例が見える。

それ以降は「〇門端」の形の例がわずかに残るのみで、唐以前では梁の劉孝勝の「詠益智詩」(『藝文類聚』卷八七)に「挺芳銅嶺上、擢穎石門端」(芳りを挺ぐ、銅嶺の上、穎を擢ぶ、石門の端)という、益智の草が生える場所を詠じた一例のみ。

唐の詩においては、他に王維の「東溪翫月」(趙注本卷一五。王昌齡の作ともいう)に「月從斷山口、遙吐柴門端」(月、斷山の口從りし、遙かに吐く、柴門の端)という一例が見えるのみ。

この門について、李樹政注は、冒頭四句をまとめて解釈し、次の句に出る「荒城」の城門と解している。その方が自然であり、しばらく旅をしてから立ち止まるのが普通であろうが、二句で換韻されていることとすぐ前の句に同じ「門」の字が用いられていることを重視すれば、出発したものの、すぐに前途の苦難を思い、意気消沈して歩みをとめることを表現しているとも解せよう。

冒頭、二句一韻でひとまとまりとなっている。旅立ちの状況が記され、旅の苦難が予想されて、羈旅の苦しみという詩のテーマが設定されている。

3・4 荒城無人霜滿路、野火燒橋不得度

〔荒城無人〕荒れ果てた町に人影はない。

〔荒城〕は荒れ果てた町。李樹政注はこの二句を戦乱で荒廃した様子と解している。

唐までの詩に数例、謝朓の「臨溪送別」(曹融南注本卷三)に「荒城迴易陰、秋溪広難渡」(荒城、迴かにして陰り易く、秋溪、広くして渡り難し)といい、庾信の「將命至鄴、酬祖正員」(倪璠注本卷)に「古碑文字尽、荒城年代迷」(古碑、文字尽き、荒城、年代迷う)という。後者はかつて三国魏の都であった鄴の荒廃ぶりを「荒城」の語で表現したもののようである。唐に入つて、駱賓王の「過故宋」(『駱臨海集箋注』卷五)に「旧国千年尽、荒城四望通」(旧国、千年尽き、荒城、四望通ず)といい、王維の「帰嵩山作」(趙本卷七)に「荒城臨古渡、落日滿秋山」(荒城、古渡に臨み、落日、秋山に滿つ)というなどの用例がある。いずれも荒れ果てた古い町を「荒城」と表現しているようだ。

杜甫に二例あるうち、曲阜を「荒城」と表現した「登兗州城樓」(『詳註』卷一)に「孤嶂秦碑在、荒城魯殿餘」(孤嶂、秦碑在り、荒城、魯殿餘る)という例は、『唐詩選』にも収められて名高い。

張籍には他に二例、そのうち416「秋夜長」(卷七)に「荒城為村無更声、起看北斗天未明」(荒城、村と為りて、更声無く、起ちて北斗を看れば、天未だ明けず)という例は、樂府の中に「荒城」の語を用いた例。城壁に囲まれたかつての町が、荒れ果てて農村となつていないことを詠じている。

これらの例からすると、時の流れによる荒廢の例が多いようであり、特に戦乱による荒廢と限定しなくてもよいのではないかと思われる。

〔無人〕は常見の語。5「寄遠曲」に「美人來去春江暖、江頭無人湘水滿」(美人、來去して、春江暖かし、江頭に人無く、湘水滿つ)の句が見え、他に7「征婦怨」・22「永嘉行」にも見えた(いずれも卷一)。

〔荒城〕と「無人」を同時に用いた先例として、大曆年間の進士である劉復の「經禁城」(『全唐詩』卷三〇五)に「荒城無人路、秋草飛寒螿」(荒城、無人の路、秋草、寒螿飛ぶ)の句がある。これは荒れ果てた皇宮を描いており、あるいは安史の乱などの爪痕の残る長安の宮城の様子を描いたものかもしれない。

〔霜滿路〕霜が道いっぱい降りている。

〔霜〕が「滿」ちると表現した例としては、唐以前の詩においては、沈約の「江離生幽渚」(『樂府詩集』卷三五)に「夙昔玉霜滿、且暮翠空」(夙昔、玉霜滿ち、且暮、翠空し)といい、陶弘景の「寒夜怨」(『樂府詩集』卷七六)に「空山霜滿高煙平、鉛華沈照帳孤明」(空山、霜滿ちて、高煙平らかに、鉛華、照りを沈めて、帳、孤り明らかなり)というなどの句がある。

唐に入つて、李白の「古風五十九首」其二十六(王琦注本卷二)に「坐看飛霜滿、凋此紅芳年」(坐ろに看る、飛霜の滿ちて、此の紅芳の年を凋まし

むるを」といい、有名な張継の「楓橋夜泊」(『全唐詩』卷二四二)に「月落烏啼霜滿天、江楓漁火對愁眠」(月落ち 烏啼いて 霜 天に滿つ、江楓漁火 愁眠に對す)というなどの例がある。

「楓橋夜泊」の例を典型として、以上の例は大氣中に霜の氣が満ちているというような方向の例のようだが、少し前の時代の寶庠の「于闐鐘歌、送靈徹上人帰越」(『全唐詩』卷二七一)に「有時清秋日正中、繁霜滿地天無風」(時に 清秋 日の正中する有り、繁霜 地に満ちて 天に風無し)という例は、ここと同じく地面いっぱい霜が降りるという例である。

杜甫には「霜雪滿」という形の例が一例のみ、「奉寄河南韋尹丈人」(『詳註』卷一)に「江湖漂短褐、霜雪滿飛蓬」(江湖 短褐を漂わし、霜雪 飛蓬に滿つ)という。乱れた髪に満ちるといふ例。張籍にはこの例のみ。

また、「路」に「滿」といふ表現は、古樂府「鷄鳴」(『樂府詩集』卷二六)に「五日一時來、觀者滿路傍」(五日に一時來たり、觀る者 路傍に滿つ)と「滿路傍」の形で見えるほか(ただし『宋書』樂志三は「道傍」に作る)、庾信の「結客少年場行」(倪璠注本卷五)に「結客少年場、春風滿路香」(客と結ぶ 少年の場、春風 路に満ちて香る)といい、唐に入つて宋之間の「奉和幸大薦福寺」(『全唐詩』卷五三)に「香刹中天起、宸遊滿路輝」(香刹 中天に起り、宸遊 滿路輝く)といい、常建の「燕居」(『全唐詩』卷一四四)に「青苔常滿路、流水復入林」(青苔 常に路に満ち、流水 復た林に入る)というなどの例が見える。

杜甫には用例がなく、張籍には「滿路中」の形でもう一例、240「田司空入朝」(卷四)に「朝官叙謁趨門外、恩使宣迎滿路中」(朝官 謁するを叙べて 門外に趨き、恩使 迎うるを宣べて 路中に滿つ)という例がある。

この部分を百名家全集本・『叩彈集』等は「雪滿路」に作る。徐注は下に「車上霜」の語があることから「雪」に作るテキストを非とするが、「一応「雪」が「滿」とすると表現した用例を挙げておく。

唐以前の詩においては、鮑照の「發長松偶雪」(『鮑參軍集注』卷五)に「振風搖地局、封雪滿空枝」(振風 地局を揺るがし、封雪 空枝に滿つ)と「〇雪滿」の形の用例が見え、また梁の武帝の「子夜四時歌」十六首「冬歌四首」其二(『古詩紀』卷七四)には、「別時鳥啼戸、今晨雪滿堦」(別れし時 鳥戸に啼き、今晨 雪 堦に滿つ)というなどの例がある。

唐に入つて、徐晶の「贈温駙馬汝陽王」(『全唐詩』卷七五)に「再看冬雪滿、三見夏花滋」(再び見る 冬雪の滿つるを、三たび見る 夏花の滋るを)といい、李白の「送族弟凝至晏瑒、單父三十里」(王琦注本卷)に「雪滿原野白、戎裝出盤遊」(雪満ちて 原野白く、戎装して 出でて盤遊す)というなどの例がある。

杜甫には上に挙げた「霜雪滿」の例のみ、張籍には他に用例がない。また、四庫全書本は「霜滿野」に作るが、これは次の「野火」に引かれたための誤りであろう。

〔野火烧橋不得度〕野火が橋を焼いており渡ることができない。

「野火」のはのび。野原を焼く火のこと。それが橋を焼き落としているため、川を渡れないという。この火について、徐注は秋冬の頃人々が野原の草を焼く火、すなわち野焼きの火と解釈し、李樹政注は先に述べたようにこの二句を戦乱で荒廃した様子としており、戦火と解しているようだ。

『戦国策』楚策一に楚王の狩猟の様子を描く中に「野火之起也若雲蜺、兕虎嗥之声若雷霆」(野火の起るや雲蜺の若く、兕虎嗥ゆるの聲 雷霆の若し)といい、『列子』天瑞に列子が物の変化を説く中に「羊肝化為地皋、馬血之為軫隣也、人血之為野火也」(羊の肝は化して地皋と為り、馬の血は之れ軫隣と為り、人の血は之れ野火と為るなり)といい、『史記』龜策列伝に神龜のいる林「嘉林」を描写して「野火不及、斧斤不至」(野火 及ばず、斧斤 至らず)というなど、古くから用いられることば。『戦国策』の「野火」は狩猟の時に獲物をいぶし出すためにたく火をいう。『列子』の例は前の「軫隣」とともに鬼火の類をいうとされるが、現代的に解釈すれば自然発生的な火をいうと解せよう。『史記』の例は、人為的なもの・自然発生的なもの全てを含んだ、野火一般を指した例と思われる。

詩においても、古く曹植の「吁嗟篇」(『樂府詩集』卷三三)に「願為中林草、秋随野火燔」(願はくば 中林の草と為り、秋には 野火に随いて燔かれん)という例があるが、唐までの詩においては、他に陳の江総の「秋日登廣州城南樓詩」(『藝文類聚』卷二八)に「野火初煙細、新月半輪空」(野火 初煙細く、新月 半輪空し)という例があるのみのようだ。曹植の例は「秋」といつており、野焼きの火を意識したものか。江総の例も秋の日の遠望の作であり、野焼きの様子を描いたものと思われる。

唐に入つても初唐には用例がないが、盛唐になって多くの用例が見られるようになる。王維の「出塞作」(趙本卷一〇)に「居延城外獵天驕、白草連山野火燒」(居延城外 天驕獵し、白草 山に連なり 野火焼く)といい、崔曙の「早發交崖山、還太室作」(『全唐詩』卷一五五)に「川氷生積雪、野火出枯桑」(川氷 積雪に生じ、野火 枯桑に出づ)といい、岑參の「登古鄴城」(『校注』卷一)に「東風吹野火、暮入飛雲殿」(東風 野火を吹き、暮れに 飛雲殿に入る)というなどの例がある。王維の例は『戦国策』と同じく狩猟の火、崔曙の例は『列子』と同じく鬼火と解されており、自然発生的な火といえよう。岑參の例は、春ではあるが、野焼きの火の例のようであ

る。奈良の若草山の山焼きのように、春にも行われたのであろう。

杜甫に一例、「李潮八分小篆歌」(『詳註』卷一八)に「嶧山之碑野火焚、棗木伝刻肥失真」(嶧山の碑は 野火焚き、棗木の伝刻 肥えて真を失う)という。李斯の書いた嶧山の頌徳の碑が野火に焼かれたという例で、野火一般を指したもので、どのような火かについてはあまり意識されていないようだ。

張籍にもう一例、422「樵客吟」(卷七)に「秋来野火烧樵林、枝柯已枯堪採取」(秋来 野火 樵林を焼き、枝柯 已に枯れて 採取するに堪えたり)の句がある。これは秋の野焼きの火をいう例のようである。

以上のように、他の「野火」の用例からすると、特に戦火に限って解釈する必要はないようだ。もちろん、野焼きをして誤って橋を焼くことはほとんどないであろうし、張籍の時代に各地に戦いの傷跡が残っていたことも確かであろうが、ここでは野火一般の意味で解釈しておく。橋を焼いた出火原因よりも、橋が焼け落ちて渡れない方に主眼があろう。

百名家全集本・『叩彈集』等は「火烧野橋」に作る。

「野橋」の語は、沈佺期の「咸陽覽古」(『全唐詩』卷九六)に「野橋疑望日、山火類焚書」(野橋 日を望むかと疑い、山火 書を焚くに類す)といひ、劉長卿の「碧澗別墅喜皇甫侍御相訪」(『全唐詩』卷一四七)に「野橋経雨断、澗水向田分」(野橋 雨を経て断え、澗水 田に向かいて分かる)といひなどの例がある。後者はこの詩と同じく橋がわたれなくなっている描写。

杜甫には文字の異なる例を除けば二例、一例を挙げれば、「野望、因過常少仙」(『詳註』卷一〇)に「野橋齊度馬、秋望転悠哉」(野橋 齊しく馬を度し、秋望 転た悠なるかな)という句がある。張籍には他に用例がない。

「不得度(渡)」の表現を詩に用いた例としては、唐以前では陸機の「擬古詩十二首」其三「擬迢迢牽牛星」(『文選』卷三〇)に「跋彼無良縁、睨焉不得度」(跋彼たるは 良縁無く、睨焉たるは 度を得ず)といひ、劉宋の「石城樂」五曲其四(『樂府詩集』卷四七)に「水高不得渡、与飲合生居」(水高くして 渡るを得ず、飲と 合に生居すべし)という例があり、唐では戴叔倫の「穀城逢楊評事」(『全唐詩』卷二七四)に「横流夜長不得渡、駐馬荒亭逢故人」(横流 夜長くして 渡るを得ず、馬を荒亭に駐めて 故人に逢う)の例がある。

冒頭の二句で予想された羈旅の困難を具体的に詠ずる部分。ここでは、霜の降りる冷たい季節に、ゴーストタウンと化した寂しい町を進んでいくと、橋が焼け落ちて渡れないという苦勞が描かれる。次の二句と同じ韻でひとま

とまりになっている。

5・6 寒兔入窟鳥帰巢、僮僕問我誰家去

「寒兔入窟」凍えたウサギが穴に入る。

テキストは「兔」を「蟲(虫)」に作る。徐注はこれを非として、「兔窟」の語があることを指摘する。ここでは百名家全集本が兔に作るのに従うことにした。「兔」の異体字の「兔」が、「蟲」の省略形「虫」の異体字の「虫」(四庫全書本はこの字に作る)に似ているために、誤ったものであろう。

「寒兔」は唐までの詩には一例のみ、沈約の「宿東園」(『文選』卷二二)に「茅棟嘯愁鷗、平崗走寒兔」(茅棟に 愁鷗嘯き、平崗に 寒兔走る)という句がある。唐詩においても例は少なく、以前の例としては、孟浩然の「南帰阻雪」(『全唐詩』卷一五九)に「積雪覆平皋、饑鷹捉寒兔」(積雪 平皋を覆い、饑鷹 寒兔を捉う)という一例のみ。他に、同時代に二例、晩唐に二例ある。

ただ、『淮南子』説林訓に「鳥飛反郷、兔走帰窟、狐死首邱、寒将翔水、各哀其所生」(鳥は飛びて郷に反り、兔は走りて窟に窟り、狐は死して邱に首かき、寒将 水に翔るは、各おの其の生まるる所を 哀めばなり)と、鳥(寒将)は水鳥)と狐・兔が生まれ場所を懐かしむことを述べており、これに基づいて王粲の「七哀詩二首」其二(『文選』)に「狐狸馳赴穴、飛鳥翔故林」といひ、劉鑠の「擬古二首」其一「擬行行重行行」(『文選』卷三一)に「寒蟬翔水曲、秋兔依山基」(寒蟬 水曲に翔り、秋兔 山基に依る)というなど、穴に帰るキツネやウサギと巢に帰る鳥を対にした例は数多い。

なお、「寒虫」は「寒兔」よりやや例が多く、唐までの詩では、斉の劉繪の「詠博山香炉詩」(『初学記』卷二五)に「寒虫飛夜室、秋雲没暝天」(寒虫 夜室に飛び、秋雲 暝天に没す)といひ、梁の呉均の「与柳惲相贈答六首」其五(『玉臺新詠』卷六)に「寒虫隱壁思、秋蟻繞燭飛」(寒虫 壁に隠れて思ひ、秋蟻 燭を繞りて飛ぶ)というなど数例がある。唐に入ってから用例が少なく、張籍のこの例を除けば、吳少微の「長門怨」(『全唐詩』卷九四)に「空階白露色、百草寒虫鳴」(空階 白露の色、百草 寒虫鳴く)といひ、常建の「聽琴、秋夜贈寇尊師」(『全唐詩』卷一四四)に「寒虫臨砌急、清吹裏灯頻」(寒虫 砌に臨んで急に、清吹 灯を裏らして頻りなり)といひ二例を見るのみである。

「鳥帰巢」鳥が巢に帰る。

先に挙げた「淮南子」を用いた例の他にも、曹植の「贈白馬王彪」七章其

四(『文選』卷二四)に「帰鳥赴喬林、翩翩厲羽翼」(帰鳥 喬林に赴き、翩翩として 羽翼を厲う)といい、陶淵明の「飲酒詩二十首」其五(『陶淵明集校箋』卷三)に「山氣日夕佳、飛鳥相与還」(山氣 日夕に佳く、飛鳥相い互に還る)というなど、夕暮れに巢に帰る鳥は、古くから多くの詩に詠じられている。

「僮僕」しもべ。召使い。6「行路難」(卷一)に「弊裘羸馬苦難行、僮僕飢寒少筋力」(弊裘 羸馬 難行に苦しみ、僮僕 飢寒し 筋力少なし)の句が見えた。その【語釈】参照。

「問我誰家去」誰の家に行くのかと私に尋ねてくる。今夜の宿はどうするつもりかと訪ねるのである。

「誰家」は26「北邙行」(卷一)に「千金立碑高百尺、終作誰家柱下石」(千金 碑を立て 高さ百尺、終に 誰が家の柱下の石と作る)の句が見えた。その【語釈】参照。

前の部分と同じ韻になっている二句。旅の途中で日が暮れて、動物たちさえねぐらに帰るのに、今夜の宿も決まらない様子が描かれる。その日の宿が決まらないという状況は、岑参の「磧中作」(『校注』卷二)に「今夜不知何処宿、平沙万里絶人煙」(今夜 知らず 何れの処にか宿する、平沙 万里 人煙絶ゆ)と描かれて名高く、権徳輿も「舟行夜泊」(『全唐詩』卷三二九)に「今夜不知何処泊、断猿晴月引孤舟」(今夜 知らず 何れの処にか泊する、断猿 晴月 孤舟を引く)とそれを踏まえるが、張籍は召使いから尋ねられるという状況を作り出している。自分でも不安に思っていることを他人に指摘されるのはつらいものであり、まして自分が面倒を見てやるべき召使いから尋ねられるのは、一層いたたまれない状況であろう。

7・8 行尋田頭暝未息、双轂長轅礙蒺藜

〔行尋〕ゆくゆく尋ねる。歩きながら探す。

ことばの例としては、『後漢書』百官志五「県郷」の部分に、「凡有賊発、主名不立、則推索行尋」(凡そ賊の発して、主名の立たざる有れば、則ち推索し行尋す)と見えている。以前の詩に「行尋」でまとまる例は、皇甫冉の「重陽日、酬李観」(『全唐詩』卷二五〇)に「愁看日晚良辰過、歩歩行尋陶令家」(愁いて看る 日晚れて 良辰の過ぐるを、歩歩 行尋す 陶令の家)という例が見えるのみ。

張籍にもう一例、264「和韋開州盛山十二首」其二「梅溪」(卷五)に「自愛新梅好、行尋一徑斜」(自ずから愛す 新梅の好きを、行尋して 一徑斜めなり)という。

〔田頭〕畑のあたり。畑のそば。

『東觀漢記』王丹伝に「每歲農時、載酒肴、便於田頭大樹下飲食、勤勉之」(毎歳の農時に、酒肴を載せ、便ち田頭の大樹の下に於いて飲食し、之を勤勉す)という例が見える。詩における以前の例としては、梁の王金珠の阿子歌に「可憐双飛鳧、飛集野田頭」と、「○田頭」の形の例を見るのみ。

王建の「空城雀」(『王建詩集』卷一)に「八月小兒挾弓箭、家家畏我田頭飛」(八月 小兒 弓箭を挾み、家家 我の田頭に飛ぶを畏る)という句があるなど、張籍と同時代になって用例が増える。

張籍にはこの他に、419「江村行」(卷七)に「田頭刈莎結為屋、归来繫牛還独宿」(田頭 莎を刈りて 結びて屋と為し、帰り来たりて 牛を繫ぎ 還りて独り宿る)という例がある。

四庫全書本は「野径」に作る。野の小道。こちらであれば用例はやや多い。唐までの詩では、沈約の「宿東園」(前出)に「野径既盤紆、荒阡亦交互」(野径 既に盤紆たり、荒阡 亦た交互す)といい、隋の王由礼の「賦得巖穴無結構詩」(『藝文類聚』卷三六)に「早梅香野径、清澗響丘琴」(早梅 野径に香り、清澗 丘琴に響く)の句がある。

唐に入って、王勃の「山亭夜宴」(『全唐詩』卷五五)に「森沈野径寒、肃穆巖扉静」(森沈として 野径寒く、肃穆として 巖扉静かなり)といい、于季子の「奉和聖製夏日遊石淙山」(『全唐詩』卷八〇)に「山扉野径朝花積、帳殿帷宮夏葉連」(山扉 野径 朝花積み、帳殿 帷宮 夏葉連なる)というなどの例がある。

杜甫に二例あるうち、「春夜喜雨」(『詳註』卷九)の「野径雲俱黑、江船火独明」(野径 雲 俱に黒く、江船 火 独り明らかなり)の例は名高い。張籍には他に用例がない。

〔暝未息〕日が暮れても休むことができない。泊まる場所が見つからない。「未息」は、従来の詩の用例は「いまだやまず(いまだ終わらない)」の例がほとんどのようである。

なお、静嘉堂本・『楽府詩集』は「暗未息」に作る。ほぼ同じ意味といえよう。四庫全書本作「心未息」に作る。こちらであれば、心が安らがない、落ち着かないという意味になるう。

「双轂」轂はこしき。車輪の中央にあり、「輻」(や)が集まるもの。中を車軸が貫く。双轂で車の両輪のことをいう。

李冬生注は、『老子』第十一章に「三十輻、共一轂、当其無、有車之用」(三十輻は、一轂を共にし、其の無きに当たって、車の用有るなり)と、こしきの中央に穴が開いていることにより無の用を説く例を引き、さらに『楚辞』九歌「国殇」で戦鬪を描く中に、「操吳戈兮被犀甲、車錯轂兮短兵接」(吳戈を操りて 犀甲を被り、車は轂を錯えて 短兵接す)と、錯綜する車を「轂」の文字を用いて表現する例を引いている。

以前の用例は一例のみ、李嶠の「車」(『全唐詩』卷六〇)に「五神趨雪至、双轂似雷奔」(五神 雪に趨りて至れば、双轂 雷の奔るに似たり)という。同時代の王建に一例、陳注も引く「代故人新姬侍疾」(『王建詩集』卷四)に「双轂 轂を回らさず、子疾みて 已に傍に在り」とある。張籍には他に用例がない。

「長轡」「轡」はながえ、車のかじ棒。車体の左右から前につきだして、馬を付けて引かせるための長い棒。

李冬生注は、『周礼』冬官・考工記の「車人」の条に、「凡為轡、三其輪崇」(凡そ轡を為るには、其の輪の崇さを三にす)という例を引く。

「長轡」は轡の特徴である「長」の字を冠した語だが、用例は少なく、唐以前の例は未見。唐詩にも他に一例のみ、陳注にも引く元結の「与党侍御」(『全唐詩』卷二四一)に「長轡有修轡、馭者令爾馳」(長轡 修轡有り、馭者 爾をして馳せしむ)という例を見るのみ。

四庫全書本は「長行」に作る。こちらであれば、「長く行きて」と読むことにならうか。この意味での用例は未見。張籍にも他に例がない。

「礙荆棘」いばらにさまたげられる。「礙」はさまたげる、「荆棘」はいばら、とげのある植物。

「荆棘」は『春秋』襄公十四年の『左伝』に「昔秦人迫逐乃祖吾離于瓜州、乃祖吾離被苦蓋、蒙荆棘、来歸我先君」(昔 秦人 乃の祖吾離を瓜州に迫逐せしとき、乃の祖吾離 苦蓋を被り、荆棘を蒙りて、来りて我が先君に歸す)といい、『老子』三十章にも「師之所処、荆棘生焉」(師の処る所、荆棘生ず)というなど、古くから用いられることば。前者は旅路の困難を「荆棘」の語で表現した例、後者は戦争の後に土地が荒廃することをいう例。

唐までの詩にも用例は多く、曹植の『送应氏诗二首』其一(『文選』卷二〇)では「垣牆皆頓擗、荆棘上参天」(垣牆 皆な頓擗し、荆棘 上天に参る)と荒廃した洛陽の様子を描くの用に、張載の「七哀诗二首」其一(『文

選』卷二三)にも、漢の皇帝の陵墓が荒廃した様子を「蒙籠荆棘生、蹊逕登童豎」(蒙籠として 荆棘生じ、蹊逕 童豎登る)と表現する。

唐に入つて、盧照隣の「詠史四首」其三(『全唐詩』卷四一)に「干戈及黄屋、荆棘生紫宮」(干戈 黄屋に及び、荆棘 紫宮に生ず)といい、劉長卿の「時平後、送范倫婦安州」(『全唐詩』卷一五一)に「憶昔扁舟此南渡、荆棘煙塵滿歸路」(憶う 昔 扁舟 此に南渡し、荆棘 煙塵 歸路に滿つ)というなどの例がある。前者は宮殿の荒廃を描いた例、後者は旅路の困難を描いた例のようである。

杜甫に五例あるうち、「哀王孫」(『詳註』卷四)に「已經百日竄荆棘、身上無有完肌膚」(已に 百日 荆棘に竄るを経て、身上 完き肌膚有る無し)という例は、いばらの道を行く困難をいう。張籍には他に用例がない。

前の二句を承けて、宿を探す様子が描かれた二句。次の二句と同じ韻でひとまとまり。田舎道を探し歩くが暗くなってもなかなか見つからず、その上いばらが車の進むのをじゃましてばかりいるという状況が描かれる。

9・10 縁岡入澗投田家、主人舂米為夜食

〔縁岡〕岡にそって行く。

以前の用例は未見。同時代の王建に三例(一例は張籍の作ともいう)、そのうち「春去曲」(『王建詩集』卷二)に「縁岡繞澗卻歸來、百回看著無花樹」(岡に縁り 澗を繞りて 卻って歸り來たり、百回 看著す 花無きの樹)という例は、この詩と同じく「澗」を対にして用いている。

張籍に他に一例は、王建の作ともされる²⁶¹「寒食看花」(卷四)に「顛狂逸樹猿離鎖、踴躍縁岡馬斷羈」(顛狂して 樹を逸り 猿は鎖を離れ、踴躍して 岡に縁り 馬は羈を断つ)という例。

〔入澗〕谷川に入る。

謝靈運の「山居賦」(『宋書』謝靈運伝)に「入澗水涉、登嶺山行」(澗に入りて 水涉し、嶺を登りて 山行す)という例がある。

唐までの詩においては、江総の「宮涅繫纈還塗作詩」(『古詩紀』卷一五)に「留連入澗曲、宿昔陟巖椒」(留連して 澗曲に入り、宿昔 巖椒を陟る)と、「入澗〇」の形の例が一例見えるのみ。

唐に入つても、初盛唐に用例がない。同時代に数例あるうち一例を挙げれば、王建の「上陽宮」(『王建詩集』卷八)に「幔城入澗橙花發、玉輦登山桂

葉稠（幔城 澗に入れば 橙花発き、玉輦 山に登れば 桂葉稠る）という例がある。

張籍にはこの例のみ。

〔投田家〕 農家に投宿する。

「田家」は田舎の家、農家。古く魏の応璩の「百一詩」（『文選』卷二二）に「田家無所有、酌醴焚枯魚」（田家 有る所無く、醴を酌み 枯魚を焚く）という。応璩の「田家」は詩の語り手を指し、もてなす側ともてなされる側の違いはあるが、貧しい「田家」が心づくしのもてなしをする点で、この詩と共通する。

唐までの詩では、他にも陳注の引く范雲の「贈張徐州謾詩」（『文選』卷二六）に「田家樵採去、薄暮方來歸」（田家 樵採に去き、薄暮 方に來たり 歸る）というなどの例がある。

唐に入っても、盧照隣の「春晚山莊率題二首」其二（『全唐詩』卷四二二）に「田家無四鄰、独坐一園春」（田家に 四鄰無く、独り坐す 一園の春）といい、丘為の「題農父廬舍」（『全唐詩』卷一二九）に「湖上春已早、田家日不閑」（湖上 春 已に早く、田家 日に閑ならず）というなど、多くの例がある。

杜甫には「洗兵行」（『詳註』卷六）に「田家望望惜雨乾、布穀処処催春種」（田家 望望 雨の乾くを惜しみ、布穀 処処 春種を催す）というなど、全六例の用例がある。張籍の例はこれのみ。

〔主人〕 「田家」の主人を指す。

「主人」の語は28「謙客詞」（卷一）に「上客不用顧金羈、主人有酒君莫違」（上客 金羈を顧みるを用いざれ、主人 酒有り 君 違ふこと莫れ）の句が見えた。その【語釈】参照。

ここで妻や子供でなく「主人」と限定しているのは、わざわざ一家の大黒柱である主人がしてくれた、というニュアンスを含んでいよう。

〔春米〕 米をついて精米する。

語の用例としては『漢書』五行志上に、「春秋」桓公十四年の「御廩」ということばについて、「劉向以為、御廩、夫人八妾所春米之臧、以奉宗廟者也」（劉向以為、御廩は、夫人八妾の米を春く所の臧、以て宗廟に奉る者なり）といい、陳注も引く『十六國春秋』卷七八「蜀録三」の「李勢」の条に、「李漢家春米、米自臼中跳出」（李漢 家に米を春くに、米臼中より跳ねて出づ）というなどの例があるが、詩における用例は、唐までの詩・唐詩

を通じて未見。

百名家全集本は「春禾」に作る。こちらはさらに用例が少なく、宋以後の例しか見当たらない。

米を炊く際に精米するのは、現代と違って当たり前のことだったのかもしれないが、その当たり前のことを詠じているのも、精米したての御飯を食べさせようという、心づくしのもてなしをしてくれたことを表しているのではないだろうか。

〔為夜食〕 夜の食事を作ってくれた。

「夜食」は夜の食事。『史記』孟嘗君列伝に、「孟嘗君曾待客夜食」（孟嘗君曾て客を待ちて夜食す）という用例があるが、これは「夜に食する」の意に解されるのが一般的のようだ。

唐までの詩に例がなく、唐詩においても全五例のみ。先行する例は二例、喬知之の「羸駿篇」に「扣氷晨飲黃河源、私雪夜食天山草」（氷を扣いて晨に飲む 黃河の源、雪を払い 夜に食らう 天山草）というなど、どちらも夜に食するという例である。

この詩の他には同時代の白居易に夜の食事の意味で二例があるのみ。陳注の引く例を挙げれば、「閑意」（一〇四二）に「病停夜食閑如社、慵擁朝裘暖似春」（病停夜食閑如社、慵擁朝裘暖似春）（病停夜食閑如社、慵擁朝裘暖似春）という。

ここでわざわざ「夜食」と表現しているのは、宿を探しあぐねた結果、食事が遅くなったことを表しており、そんな時間に歓待してくれたということをも表していよう。

前の二句を承けて、苦労の結果、今夜の宿が決まったことを記す二句。前の二句では畑の周りだったが、この二句では岡や谷まで探したことが詠じられ、そうしてやっと一夜の宿が見つかる。素朴な農家の主人は、旅人のために、つきたての米を使って、夜遅い食事を作ってくれる。苦しい旅の中で、他人の温かい思いやりに心がなごむひとときが描かれているといえよう。

11・12 晨鷄喔喔扉屋傍、行人起掃車上霜

〔晨鷄〕 朝早く鳴くニワトリ。一番鷄。

古く漢の「鷄鳴歌」（『樂府詩集』八三）に「東方欲明星爛爛、汝南晨鷄登壇喚」（東方 明けんと欲して 星爛爛たり、汝南の晨鷄 壇に登りて喚ぶ）の句があり、阮籍の「詠懷詩十七首」其七（『文選』二三）にも「晨鷄鳴高樹、命駕起旋扉」（晨鷄 高樹に鳴けば、駕を命じて 起ちて旋り帰らん）

とあり、陳注も引く陶淵明の「飲酒詩二十首」其十六(『陶淵明集校箋』卷三)にも「披褐守長夜、晨鷄不肯鳴」(褐を披て 長夜を守れば、晨鷄肯て鳴かず)というなど、多くの用例がある。

唐詩においても、陳叔達の「後洛置酒」(『全唐詩』卷三〇)に「敞閣猶未遂、此夕待晨鷄」(敞閣 猶未だ遂げず、此の夕べ 晨鷄を待つ)といい、王維の「丁字田家有贈」(趙本卷三)に「晨鷄鳴隣里、群動從所務」(晨鷄隣りに鳴けば、群動 務むる所に従う)というなどの例がある。

杜甫に一例、「狂歌行、贈四兄」(『詳註』卷一四)に「長安秋雨十日泥、我曹備馬聽晨鷄」(長安 秋雨 十日泥あり、我が曹 馬を備えて 晨鷄を聴く)という。張籍にはこの例のみ。

〔喔喔〕ニワトリの鳴き声の擬態語のようである。

盛唐までに用例の見当たらないことば。劉禹錫の「平蔡州三首」其二(『箋証』卷二五)に「汝南晨鷄喔喔鳴、城頭鼓角音和平」(汝南の晨鷄 喔喔として鳴き、城頭の鼓角 音和平なり)といい、白居易の「曠鷄」(〇三一九)に「喔喔十四雛、罩縛同一樊」(喔喔たり 十四の雛、罩縛す 同一の樊)というなど、張籍と同時代の詩人から例が見え始める。張籍の例はこれのみ。

〔茆屋傍〕「茆屋」は「茅屋」に同じ。茅葺きの建物。

古く『春秋』桓公二年の『左伝』に「是以清廟茅屋、大路越席、大羹不致、粢食不饗、昭其儉也」(是を以て清廟は茅屋、大路は越席、大羹は致さず、粢食は饗せざるは、其の儉を昭らかにするなり)と、子孫に儉約を示した中に、廟の屋根を茅葺きにしたという例が見える。また『墨子』雜守にも、敵の攻撃から守る方法を記す中に「塗茅屋若積薪者、厚五寸已上」(茅屋若しくは積薪を塗るには、厚さ五寸已上)というなど、古くから多くの用例がある。

ただ、唐までの詩には一例のみ。鮑照の「代辺居行」(『鮑參軍集注』卷四)に「陋巷絶人径、茅屋摧山岡」(陋巷 人径絶え、茅屋 山岡摧む)という例がある。これは詩の語り手の家を謙遜して「茅屋」と述べたもの。

唐に入っても、初唐には例がなく、盛唐から例が多くなる。『唐詩選』に収められて名高い王維の「答張五弟」(趙本卷六)に「終南有茅屋、前対終南山」(終南に 茅屋有り、前は終南山に對す)という例は、自身の家の謙称として用いたもの。岑參の「尋鞏南李处士別業」(『校注』卷一)に「先生近南郭、茅屋臨東川」(先生 南郭に近く、茅屋 東川に臨む)という例は、詩題にいう李处士の別業を敬愛の念を込めて「茅屋」と呼んでいるだろう。

杜甫は詩中に十四例、詩題に五例と多くの例を残している。そのうち、「已

上人茅齋」(『詳註』卷一)に「已公茅屋下、可以賦新詩」(已公 茅屋の下、以て新詩を賦すべし)という例は、知り合いの僧の庵室を親しみを込めて「茅屋」と呼んでいる。

張籍には、異同のある例を除けば他に三例、129「題李山人幽居」(卷二)に「襄陽南郭外、茅屋一書生」(襄陽 南郭の外、茅屋 一書生)というなど、いずれも隱者などの質素な家に敬愛の意を込めて用いた例のようである。この詩で泊めてくれた農家の建物を「茅屋」のことばで呼ぶのも、確かに立派な家ではなかったであろうが、粗末なあばら屋であることを非難するニュアンスではなく、感謝と親愛の情が込められているのであろう。

〔行人〕旅行く人。第一句の「遠客」と呼応することば。

すでに3「雜怨」に「山川豈遙遠、行人自不返」(山川 豈に遙かに遠からんや、行人 自ら返らず)といい、6「行路難」に「湘東行人長嘆息、十年離家婦未得」(湘東の行人 長く嘆息す、十年 家を離れて 帰ること未だ得ず)というなどの用例が見えた。その【語釈】参照。また11「送遠曲」・14「別離曲」・27「閨山月」にも見えている。

〔起掃車上霜〕起きて車に降りた霜を払う。朝が来るとすぐ出発の準備をする。「起」字、早朝の描写なので起床の意に解しておいた。

車に降りた霜を描写する例は未見。リアリティーにあふれた表現といえよう。

前の二句を承けて、翌朝の旅立ちが描かれる二句。二句一韻でひとまとまりとなる。ひとときの安らぎの夜を過ごしたが、農家の好意にずっと甘えてはいられない。旅は続けられなければならないのである。心温まる夜を過ごしただけに、翌朝の霜は身にしみて冷たい。

13・14 旧山已別行已遠、身計未成難復返

(旧山已別) 故郷の山に別れて。

「旧山」は故郷の山、引いては故郷を指す。陳注も引く謝靈運の「過始寧墅」(『文選』卷二六)に「剖竹守滄海、枉帆過旧山」(竹を剖きて 滄海に守たり、帆を枉げて 旧山に過る)という例があり、また鮑照の「与荀中書別」(『鮑參軍集注』卷五)に「願遂宿知意、不使旧山空」(願わくは宿知の意を遂げ、旧山をして空しからしめざらん)という例がある。

唐に入って、宋之問の「嵩山夜還」(『全唐詩』卷五三)に「家住嵩山下、

好采旧山薇」(家は 嵩山の下に住み、好んで 旧山の薇を采る)といい、李白の「閨情」(王琦注本卷二五)に「水或恋前浦、雲猶帰旧山」(水も或いは前浦を恋わん、雲も猶お旧山に帰る)というなど、多くの用例がある。

杜甫に一例は、「散愁二首」其一(『詳註』卷九)に「司徒下燕趙、收取旧山河」(司徒 燕趙を下し、收取せよ 旧山河)と、「旧山河」の形の例である。

張籍には他に四例あるうち、362「閑遊」(卷六)に「今朝暫共遊僧語、更恨趨時別旧山」(今朝 暫く 遊僧と共に語り、更に恨む 時を趨い 旧山に別れしを)の例は、ことと同じく「別」字とともに用いている。

「行已遠」すでに遠い道のりを歩いた。上の「旧山已別」と句中対をなしている。

「身計未成」まだ生計が立っていない。

「身計」は身を安んずる計、生活の安定の計画。『三国志』魏書・楊阜伝の末尾に付けられた裴松之の注に、「是以匡救其惡、不為身計」(是を以て其の惡を匡し救うに、身計を為さず)という例がある。ただしこれは「身の為に計らず」と読むべきかもしれない。

陳注・李冬生注は『南史』蕭引伝に、李善度・蔡脱兒といった宦官に敵しくした蕭引に対して族子が諫めた「李蔡之權、在位皆憚。亦宜少為身計」(李蔡の權、位に在りて皆な憚る。亦た宜しく少しく身計を為すべし)ということばを引き、李冬生注はさらに「顏氏家訓」帰心に、個人の信仰と国家の財政を仏教につき込むことを対比して「求道者、身計也。惜費者、國謀也」(道を求むるは、身計なり。費を惜しむは、國謀なり)というのを引いている。

初唐までの詩には見えないが、盛唐以降の詩においては、李白の「空城雀」(王琦注本卷五)に「嗷嗷空城雀、身計何戚促」(嗷嗷たり 空城の雀、身計 何ぞ戚促たる)といい、高適の「苦雨、寄房四昆季」(『全唐詩』卷二一)に「君門嗟緬邈、身計念居諸」(君門 緬邈たるを嗟き、身計 居諸なるを念う)というなどの例が散見する。

杜甫には例がなく、張籍の例もこれのみ。

「難復返」故郷に帰ることは困難である。

前の部分までは具体的な旅の様子を描いていたが、次の二句と同じ韻でひとまとまりになるこの二句は、旅に対する感慨が描かれる。遠く故郷を離れて旅をしているが、生計が立たないので帰ることもできないという状況がえ

がかれる。この生計というのが、すなわち長安で官吏となり朝廷に仕えること、すなわち当時の文人共通の目的であることは、次の二句に至って明らかにされる。

15・16 長安陌上相識稀、遙望天門白日晚

「長安陌上」長安の道の上には。「陌」は道のこと。

樂府題に「長安道」があり、梁の時代からの作品が残されているが、「長安陌」は唐までの詩に用例がない。

唐に入って、張説の「岳州別梁六入朝」(『全唐詩』卷八八)に「夢見長安陌、朝宗實盛哉」(夢に 長安の陌を見れば、朝宗 実に盛んなるかな)といい、李白の「峨眉山月歌、送蜀僧晏入中京」(王琦注本卷八)に「峨眉山月還送君、風吹西到長安陌」(峨眉山月 還た君を送り、風吹きて 西のかた 長安の陌に到る)というなどの用例が見え始める。

杜甫に一例、「冬末以事之東都、湖城東過孟雲卿、復歸劉顥宅宿、宴飲散、因為醉歌」(『詳註』卷六)に「天開地裂長安陌、寒春春生洛陽殿」(天開き 地裂く 長安の陌、寒尽き 春生ず 洛陽の殿)という句がある。ただし「長安春」に作るテキストもあるようだ。

「長安陌上」の形でも先行例がある。盧綸の「出山逢耿澗」(『全唐詩』卷二七九)に「暫到人間歸不得、長安陌上又相逢」(暫く人間に到りて 歸り得ず、長安陌上 又た相逢う)という。陳注は同時代の劉禹錫の「楊柳枝詞九首」其八(『箋註』卷二七)に「長安陌上無窮樹、唯有垂楊結別離」(長安陌上 無窮の樹、唯だ 垂楊の 別離に結ぶ有り)というのを引いている。

張籍には「長安陌」の例はこれのみ。

「相識稀」知り合いがほとんどいない。「相識」はここでは知人の意。

古く経書に例があり、「礼記」曾子問に、知り合いのための服喪中に祭りの手伝いができるかを尋ねた「相識有喪服、可以与於祭乎」(相識に喪服有るに、以て祭りに与かるべきか)ということばがあり、また、『春秋』襄公二十九年の『左伝』に「聘於鄭、見子産、如旧相識」(鄭に聘し、子産を見て、旧相識の如し)と、呉の季札が鄭を訪れ、子産と古くからの知り合いのように親しくなったことを表現するのに、「旧相識」の語を用いている。

唐までの詩にも語の例は多いが、ほとんどは「相識る」の意で用いられている。友人の意味の例としては、鮑照の「擬古八首」其七(『鮑參軍集注』卷六)に「去歲征人還、流伝旧相識」(去歲 征人還り、流伝す 旧相識なるを)といい、呉均の「初至寿春作」(『文苑英華』卷二八九)に「北州少知

旧、南陽寡相識」(北州 知旧少なく、南陽 相識寡なし) という例がある。後者はこと同じく知り合いが少ないことをいう例。

唐に入ると、王績の「野望」(『全唐詩』卷三七)に「相顧無相識、長歌懷采薇」(相い顧みるも 相識無く、長歌して 采薇を懐う)といい、『唐詩選』にも収められて名高い劉希夷の「代悲白頭翁」(『全唐詩』卷八二)に「一朝臥病無相識、三春行樂在誰辺」(一朝 病に臥して 相識無く、三春の行樂 誰が辺にか在る)というなどの例がある。

知人の意ではないが、同じく『唐詩選』に収められる盧照隣の「長安古意」(『全唐詩』卷四一)に「樓前相望不相知、陌上相逢詎相識」(樓前 相い望むも 相知らず、陌上 相逢うも 詎ぞ相識らん)という例は、長安の「陌上」で出会う人に知り合いがないという表現である。また張説の「巡辺在河北作」(『全唐詩』卷八六)に「故交索將尽、後進稀相識」(故交 索むるも將に 尽きんとし、後進 相識稀なり)という例は、こと同じく「稀」の文字を用いて表現している。

杜甫には八例あるうち、「復愁十二首」其三(『詳註』卷二〇)に「昔帰相識少、早已戰場多」(昔 帰りしとき 相識少なく、早く已に 戰場多し)という例は、知人が少ないことを表現した例。

張籍には他に四例、そのうち三例は「相識る」の例のようで、74「送南客」(卷二)に「來時旧相識、誰向日南遊」(來たりし時の 旧相識、誰か日南に向いて遊ばん)という一例は、古くからの知人の意味で用いているようである。

「遥望」はるかに眺めやる。常見の語で、24「傷歌行」(卷一)にも「高堂舞榭鎖管絃、美人遥望西南天」(高堂 舞榭 管絃を鎖し、美人 遙かに望む西南の天)と見えていた。

陳注、「古詩十九首」其十三(『文選』卷二九)に、「驅車上東門、遥望郭北墓」(車を上東門に駆り、遙かに郭北の墓を望む)という例を引く。他にも、唐までの詩においては、劉楨の「贈徐幹」(『文選』卷二三)に「步出北寺門、遥望西苑園」(歩みて北寺の門を出で、遙かに西苑の園を望む)とい、謝靈運の「晚出西射堂」(『文選』卷二二)に「步出西城門、遥望城西岑」(歩みて西城の門を出で、遙かに城西の岑を望む)というなど、用例は枚挙にいとまがない。

唐に入っても宋之問の「游陸渾南山、自歌馬嶺到楓香林、以詩代書、答李舍人適」(『全唐詩』卷五一)も「晨登歌馬嶺、遥望伏牛山」(晨に歌馬嶺に登り、遙かに伏牛山を望む)といい、李白の「單父東樓、秋夜送族弟沈之秦」(王琦注本卷一六)に「遥望長安日、不見長安人」(遙かに長安の日を望む

も、長安の人を見ず)というなど、膨大な用例がある。

杜甫には、「壯遊」(『詳註』卷一六)に「兩宮各警蹕、万里遥相望」(兩宮 各おの警蹕し、万里 遙かに相い望む)という形の例のみ。

張籍には他に二例、一例は先に触れた「傷歌行」の例、もう一例は197「贈王司馬」(卷四)に「未曾相識多聞説、遥望長如玉樹枝」(未だ曾て相い識らざるも 多く説くを聞き、遙かに望む 長きこと 玉樹の枝の如きを)という例。「相い識る」の意はあるが、個々と同じく「相識」の語とともに用いている。

「天門」天の門。天帝の門。ここでは宮中の門、引いては朝廷を指す。

陳注は『淮南子』原道訓に「經紀山川、蹈騰崑崙、排閭闔、淪天門」(山川を經紀し、崑崙を蹈騰し、閭闔を排し、天門に淪る。二十二子本による)という部分を「鑰天門」(天門を鑰す)に作るテキストに従って引く。ただ、これは天上世界にある天帝の門のことを指す例である。

詩の中にも多くの用例があるが、天帝の門の意味の例も多く、宮中の門を指す例としては、唐までの詩においては、北齊の蕭・の「奉和元日詩」(『初學記』四)に「帝宮通夕燎、天門弘曙開」(帝宮 夕べを通して燎らかに、天門 曙を弘いて開く)という例があるくらいのものである。

唐に入つて、韋嗣立の「奉和初春幸太平公主南莊應制」(『全唐詩』卷九一。卷一〇三は趙彦昭の作とする)に「主第巖巖架鵲橋、天門閭闔降鸞鑣」(主第 巖巖 鵲橋を架け、天門 閭闔 鸞鑣を降す)という例は、天帝の門を借りて太平公主が出てくる宮門を表現した例であろう。また、李白の「贈從弟南平太守之遙二首」其一(王琦注本卷一一)に「天門九重謁聖人、龍顏一解四海春」(天門 九重 聖人に謁し、龍顏 一たび解けて 四海春なり)という句は、天子に謁見することを「天門」の語を用いて表現した例。

杜甫に二例あるうち、「別唐十五誠、因寄礼部賈侍郎」(『詳註』卷一四)に「子負經濟才、天門鬱嵯峨」(子は經濟の才を負うも、天門 鬱として嵯峨たり)という例は、宮中の門が高いことを述べて、才能があるのに朝廷に入ることに難しいことをいう例で、張籍のこの句と似ている。李樹政注はもう一つの「宣政殿退朝、晚出左掖」(『詳註』卷六)に「天門日射黄金榜、春殿晴曛赤羽旗」(天門 日は射す 黄金の榜、春殿 晴れ曛ず 赤羽の旗)と宮殿を描いた例を引く。

張籍には他に一例、220「朝日救賜櫻桃」(卷四)に「仙果人間都未有、今朝忽見下天門」(仙果 人間に 都て未だ有らず、今朝 忽ち見る 天門より下るを)という。宮中から下賜された櫻桃を表現するのに「天門」の語を用いている。

『全唐詩』は「天山」に作るが、徐注にも指摘するとおり、誤りであろう。「天山」であれば西域の山名となり、詩意が通じにくい。

〔白日晩〕日が暮れる。

「白日」は、『楚辞』九章「思美人」に、「開春發歲兮、白日出之悠悠」（開春發歲、白日出でて 悠悠たり）というなど、古くからある常見の語。

張籍にも、1「野居」に「寒天白日短、簷下煖我軀」（寒天 白日短く、簷下我が軀を煖む）という句が見えたほか、13「猛虎行」・17「求仙行」・25「吳宮怨」（いずれも巻二）にも用いられている。それぞれの【語釈】参照。

この詩の「白日晩」の形でも、唐以前の詩から用例が見えており、梁の虞羲の「詠霍將軍北伐」（『文選』巻二二）に「飛狐白日晩、瀚海愁雲生」（飛狐 白日晩れ、瀚海 愁雲生ず）といい、陳子昂の「感遇詩三十八首」其二（『全唐詩』巻八三）に「遲遲白日晩、嫋嫋秋風生」（遲遲として 白日晩れ、嫋嫋として 秋風生ず）といい、李白の「答長安崔少府叔封、遊終南翠微寺太宗皇帝金沙泉見寄」（王琦注本巻一九）に「攀崖倒青天、下視白日晩」（崖を攀じて 青天を倒にし、下に視る 白日の晩るを）という。

ここで「白日晩」と表現しているのには、単に日が暮れるというだけでなく、朝廷に入れないままむなしく年をとる意が込められているように。

前の二句を承けて、旅を終えて故郷に帰れない理由が記される。長安の町に知り合いがないというのは、実は旅の目的地である長安に到着したことを表している。ところが、そこには知り合いがない。せつかくたどり着いたものの、旅人は大都会における孤独を思い知る結果となる。ここで試験に及第しないか才能が発揮できないといった表現をするのではなく、知り合いがないと表現するのは、旅の途中で出会った農家の主人との対比の意図があるのではないだろうか。長安に来るまでは困難な旅であったが、時には温かな心の交流もあった。ところが、長安に着いてみれば周りは他人ばかりで、さらに深い孤独感をかみしめることになるのである。

そして、続く後の句では、遙か彼方に見える宮殿の門に日が暮れてゆく様子が描かれる。朝廷に仕官するという希望はかなえられないまま、時はいたずらに過ぎてゆく。彼の旅には、まだ終わりは見えないのである。さらに、ここで日暮れの様子が描写されるのは、この都会にはたくさんの方がいるが、旅の途上で出会った農夫のような親切な人をおらず、泊めてもらえないというところが暗示されているかもしれない。

17・18 誰能聽我辛苦行、為向君前歌一声

〔誰能聽我辛苦行〕誰か私の苦しみの歌を聴くことのできる人はいないか。

自分の歌う歌を聴いてほしいという表現は、樂府でしばしば用いられる形式。張籍と同じく「聽我」の二字を用いた例としては、唐までの詩では、陸機の「吳趨行」（『文選』巻二八）に「四坐並清聽、聽我歌吳趨」（四坐並びに清聽し、我が吳趨を歌うを聴け）といい、鮑照の「擬行路難十八首」其一（『鮑參軍詩注』巻四）に「願君裁悲且減思、聽我抵節行路吟」（願わくば君 悲しみを裁し 且つ思いを減じ、我が抵節の行路吟を聴け）というなどの例がある。

唐に入ると、陶翰の「燕歌行」（『全唐詩』巻一四六）に「請君留楚調、聽我吟燕歌」（請う 君 楚調を留め、我が燕歌を吟ずるを聴け）といい、李白の「悲歌行」（王琦注本巻七）に「主人有酒且莫斟、聽我一曲悲來吟」（主人 酒有るも 且く斟む莫れ、我が一曲の悲來吟を聴け）というなどの例がある。

杜甫には「聽我」の例はなく、張籍にはこの例のみ。

「辛苦」は苦しみ。常見の語。すでに19「各東西」に「道路悠悠不知処、山高海闊誰辛苦」（道路 悠悠として 処を知らず、山高く 海闊くして 誰か辛苦する）の句があった。その【語釈】参照。また前詩31「賈客案」にも見えた（いずれも巻二）。

「辛苦行」について、李樹政注は「我在一路上辛苦行進的所見所聞」（私が苦しい旅の途上で見聞きしたこと）としており、「行」を旅の意味で解釈しているようにも見受けられるが、上に挙げた例で「聽我」の形に続く部分で全て曲名や歌が描かれていることからして、この「行」も、少なくとも第一義的にはうたの意で用いられたと思われる。

「辛苦行」の形でも詩に用例があり、両方の意味の用例があるようだ。唐以前では一例、江総の「宛轉歌」（『古詩紀』巻一一四）に「樓中恒聞哀響曲、塘上復有辛苦行」（樓中 恒に聞く 哀響の曲、塘上 復た有あり 辛苦の行）という。これはうたの意味で用いられた例。なお、この江総の例の「辛苦行」を、『樂府詩集』巻六〇や『文苑英華』巻二〇七（徐陵の作とする）などは「苦辛行」に作っているが、後に見る「塘上行」の別名が「苦辛行」であることを、『通志』巻四九、樂略一「相和歌三十曲」の条などでは「塘上行、亦曰塘上辛苦行」（塘上行は、亦た塘上辛苦行と曰う）と記述しており、「辛苦行」に作る『古詩紀』が誤りとは限らないようである。

唐に入ると、杜甫に三例が見えている。「龍門鎮」（『詳注』巻八）に「不辭辛苦行、迫此短景急」（辭せず 辛苦して行くを、此の 短景の急なるに迫る）というなど、すべて苦しい旅の意味となっているようだ。ただ、いず

れも曲名でないことがはっきりした文脈の中で用いられており、張籍が「聴我」とともに用いているのは事情が異なる。

なお百名家全集本・『樂府詩集』は「苦辛行」に作る。「苦辛」の語は、10「寄衣曲」(巻一)に「織素縫衣独苦辛、遠因回使寄征人」(素を織り衣を縫って、独り苦辛す、遠く回使に因りて、征人に寄せんとす)の句が見えた。その【語釈】参照。

唐に入ると「苦辛行」の用例も見えている。張籍以前に三例、李頎の「送相里造入京」(『全唐詩』巻一三四)に「嗟君未得志、猶作苦辛行」(嗟く君が未だ志を得ず、猶お苦辛の行を作すを)という。これは苦しい旅の意味で解せよう。二つめの例は、皇甫冉の「上礼部楊侍郎」(『全唐詩』巻二四九)に「勞歌終此曲、還是苦辛行」(勞歌して、此の曲を終えれば、還た是れ苦辛の行なり)という例。これは曲名の例であろう。もう一例は、戎昱の樂府「苦辛行」(『全唐詩』巻二四九)の詩題の例。『樂府詩集』(卷三五)では、相和歌辞十の清調曲三の「塘上行」の部分に付されており、「塘上行」の別名と考えられている。

〔為向君前歌一声〕私のために天子様の前でひとこえ歌う。

「君前」は君王の御前。25「吳宮怨」に「君心与妾既不同、徒向君前作歌舞」(君心与妾と、既に同じからず、徒らに君前に向いて歌舞を作す)と見えた。また29「白頭吟」にも見える(いずれも巻一)。それぞれの【語釈】参照。

静嘉堂本は「君前」を「軍前」に作るが、軍隊の前では詩意が通じない。音が近いための誤りであろう。

「一声」はひとこえ、ひとふし。『世説新語』傷逝に、ロバの鳴き声が好きだった王粲の葬儀で、文帝曹丕が「王好驢鳴。可各作一声以送之」(王は驢鳴を好む。各おの一声を作して以て之を送るべし)といったという逸話が記されている。

唐以前の詩においては、梁の簡文帝の「倡樓怨節」に(『玉臺新詠』卷九)に「片光片影皆麗、一声一轉煎心」(片光 片影 皆な麗しく、一声 一轉心を煎る)と鳥の声の表現に用いる例がある。他は文字の異なるもののようにあり、それらを含めても人の歌声について用いた例はないようだ。唐に入って、王績の「古意六首」其一(『全唐詩』卷三七)に「百金買一声、千金伝一曲」(百金 一声を買い、千金 一曲を伝う)と琴の音楽を表現し、王維の「過感化寺曇興上人山院」(趙注本卷七)に「野花藜発好、谷鳥一声幽」(野花 藜発して好く、谷鳥 一声して幽かなり)と鳥の声を表現しているほか、岑参の「醉後戲与趙歌兒」(『校注』卷五)では「座中醉客

不得意、聞之一声涙如雨」(座中の醉客 意を得ず、之を聞くこと 一声 涙雨の如し)と人の歌声に用いており、また権徳輿の「旅館雪晴、又睹新月、眾興所感、因成雜言」(『全唐詩』卷三二八)に「織手蛾眉座中設、清歌一声無斷絶」(織手 蛾眉 座中に設け、清歌 一声 断絶無し)という例は、名詞として用いてはいるが「歌」に「一声」の続く形で、妓女の歌声を表現している。

杜甫には「一声」でまとまる例は二例、一例を挙げれば、「九成宮」(『詳注』巻五)に「哀猿啼一声、客淚迸林藪」(哀猿 啼くこと一声、客淚 林藪に迸る)とサルの声に用いた句がある。もう一例は雁の声の例。張籍には他に用例がない。

結びの二句は一韻となつてひとまとまり。樂府の伝統にのつた表現で、私のこの苦勞を誰か天子様に知らせてほしいという願いが詠じられる。李樹政注が指摘するように、自分を皇帝に推挙してほしいという願いが込められた結びであろう。

【補】

一 「羈旅行」の構成

この詩は、押韻の上では1・2 / 3 / 6 / 7 / 10 / 11・12 / 13 / 16 / 17・18の六段に細かく分かれているが、内容からすると次の四段に分けることができる。

- 1・2 発端：旅人の出発
- 3 / 12 旅の途中の様子
- 13 / 16 旅人の感慨と長安への到着
- 17・18 結び：旅人の願い

結びの二句で換韻し、旅人の心情を訴えかける表現を行っているのは、これまでにもしばしば見られた、張籍の樂府が印象的な結びの二句を工夫しようとする例の一つといえよう。

二 張籍「羈旅行」の特徴

【題解】でも述べたように、『樂府詩集』卷九五新樂府辞六・樂府雜題六

の条では、孟郊の「長安羈旅行」の後に張籍の作を置いている。また、梁の時代の旅を描いた詩については、佐伯雅宣氏に「梁代の『行旅詩』―風景描写を中心に―」（『中国中世文学研究』第四五・四六合併号、二〇〇四年）の專論があり、梁の時代だけでなく、主に『文選』の行旅の部に収めるそれ以前の旅の詩についても考察されている。ここでは、孟郊の「長安羈旅行」と佐伯氏の指摘する梁およびそれ以前の旅の詩の特徴との比較を通して、張籍の「羈旅行」の独自性について触れておきたい。

まず、孟郊の作を挙げておこう。

十日一理髮	十日に	一たび髪を理め
每梳飛旅塵	梳る毎に	旅塵を飛ばす
三旬九過飲	三旬に	九たび飲を過ぐす
每食唯旧貧	食らう毎に	唯だ旧く貧し
万物皆及時	万物	皆な時に及ぶに
独余不覺春	独り余	春を覺えず
失名誰肯訪	名を失えば	誰か肯て訪れん
得意爭相親	意を得れば	争つて相い親しむ
直木有恬翼	直木には	恬んずる翼有り
静流無躁鱗	静流には	躁ぐ鱗無し
始知喧競場	始めて知る	喧競の場
莫処君子身	君子の身を	処く莫きを
野策藤竹輕	野策	藤竹輕く
山蔬薇蕨新	山蔬	薇蕨新たなり
潜歌歸去來	潜かに	歸去來を歌う
事外風景真	事外	風景真なり

この詩の場合、長安にいて万物がみな意を得ている春のさなかに、詩の語り手一人だけが失意に沈んでおり、名利を争う長安での生活をやめて、故郷に帰って田舎暮らしをしたいという願いが描かれている。すなわち、「長安羈旅行」の題が指す通り、故郷を離れて長安にいること自体が羈旅ということになる。【題解】の部分で触れたように、一応落ち着いてはいても、定住の地でなければ「羈旅」と表現されるが、この孟郊の作もその例といえよう。

孟郊には他に「長安旅情」・「長安羈旅」（ともに『全唐詩』卷三七四）の作もあり、華忱之「孟郊年譜」（華忱之・喻学才『孟郊詩集校注』所収、人民文学出版社、一九九五年）が、貞元八年（792）、孟郊が四十二歳で初めて下第した時の作としているように、この詩の語り手も、孟郊自身の姿を非常

に色濃く反映していると考えられよう。すなわち、孟郊にとって長安での生活は、旅暮らしに他ならなかったのである。

以下、以前の作品と孟郊の作・張籍の作を比較してみよう。

まず、この孟郊の作の形式面について見ると、五言で一韻到底格の作となっている。これは五言詩の全盛期である、梁およびそれ以前の旅の詩と共通したものといえよう。これに対し、張籍の作は七言の換韻格の作となっている。これは、もともと孟郊の樂府には魏晉以来の五言一韻到底の作が多く、張籍の樂府には新樂府に特徴的な七言換韻格の作が多いという、詩人の嗜好や特性の問題によるものでもあろうが、また、その内容とも関わるものではないだろうか。

孟郊の作は、先に見たように、長安での生活自体が羈旅として描かれているが、これは『文選』の行旅の部に収められる一部の詩と共通しているといえる。潘岳の「河陽県作」や「在懷県作」、謝靈運の「登江中孤嶼」（いづれも『文選』卷二六）などのように、『文選』行旅の部に収められる作品には、地方官に出されて、その地に赴任した後には作られたものがあり、すなわちある場所から別の場所に移動するという意味での「旅」はすでに終わっているものがある。しかしこれらが「行旅」の作とされているのは、佐伯氏も指摘するように、地方官に着任しても、そこは安住の地ではなく、依然として旅の途中であると考えられていたためであろう。

その意味で、長安の生活を旅とする孟郊の作は、以前の作品を踏まえたものであり、形式が『文選』所収の作と一致しているのも、そのこととも関係しているように思われる。

ただ、これらの作と孟郊の作には、詩人の実際の旅を背景にして作られているかどうかという点で大きな違いがある。『文選』所収の作は、詩人たちが実際に地方官として赴任したり、使者として遠方に赴いたりしたことを背景として作られている。そのことを最も端的に表すのが、詩題や詩中に登場する地名である。これらの地名はそこに赴任したりそこを旅したりした者以外にはほとんど意味を持たないものである。つまり、以前の作に詠じられていたのは、その詩人個人の旅といえよう。これに対し、孟郊の作の場合、先に見たように、長安での孟郊自身の生活を描いているとされてはいるが、やはり樂府作品であり、孟郊の旅という個性は薄いと思われる。「長安」という地名も、「都」や「京師」というに等しい、一般的な用い方であろう。すなわち孟郊の作には、長安で不遇の暮らしをしている多くの文人に共通の心情が描かれているといえるのではないだろうか。

一方、張籍の作の場合、孟郊と異なり、移動する旅の途上を描かれている

という点では、『文選』所収の作品と似ているといえよう。ただ、張籍の作もやはり楽府であり、張籍自身の旅の経験を踏まえているにしても、作品には経路の具体的な地名などは全く登場せず、旅一般で出会うであろう苦しみや描かれているといえる。この点では、同じ楽府である孟郊の作と共通しており、『文選』の行旅の詩とは異なっている。

また、張籍の作の場合、旅の途上のつらさをも描いた上で、目的地である長安に到着しても依然として旅のさなかであったという思いが描かれている。目的地についても旅であるという点では、潘岳らの作を踏まえたものともいえよう。だが、潘岳らの作との大きな違いは、これらの作では、任地にいることも結局は旅であることはもとも自明であるのに対し、張籍のこの作では、つらい旅が終わったと思つたら、実は長安も安住の地ではなかったという思いが中心になっている点ではないだろうか。潘岳らの作で描かれる左遷の場合、左遷先から帰るまでがすなわち旅であり、左遷が終わるまでは旅が決して終わらないことは最初から明らかである。その点では、長安にいることがすなわち旅であることが明らかかな孟郊の「長安羈旅行」も、潘岳らの例と近いものといえよう。ところが張籍は、長安に到着してようやく終わったと思つた旅が、実は全く終わっていないかった、という意外性を描こうとしたのではないかと思われるのである。

さらに、以前の行旅の詩の場合、佐伯氏も指摘するように、謝靈運の「過始寧墅」や「富春渚」(いずれも『文選』卷二六)などのような、旅の途中で出会った自然の美しさを描写する作品は別として、旅のつらさや寂しさを主題とする作品では、そのつらさ・寂しさを繰り返し強調して描くのが一般

的だったといえる。そのため、旅の途中での心なごむ出会いなどが描かれることは基本的にはないといえよう。潘尼の「迎大駕」(『文選』卷二六)では路上での「深識の士」との出会いとその人物のことばの描写があるが、これは花房英樹博士『文選三』(集英社、全釈漢文大系、一九七四年)が指摘するように、自分の感慨を「人のことばに託して写」した例外的なものである。

ところが、張籍のこの作では、旅のつらさを描きながらも、農家の主人から心づくしのもてなしを受ける様子も描かれており、つらさだけが強調されている訳ではない。もちろんその心づくしのもてなしに甘え続ける訳にはいかず、すぐにまた旅を続けなければならないという意味での旅のつらさも描かれているのだが、旅人が温かい食事と安らかな眠りの場を得られたことを描くこの部分は、やはり読者にとって心のなごむ場面となつていよう。そして、旅の途中にこのような描写があることによつて、長安についてからの苦しみもさらに強調されているといえるのではないだろうか。旅は苦しいものだったが、その途中には心温まる人とのふれあいがあった。ところが長安にたどり着いてみると、「相識」は「稀」であり、人とのふれあいさえもないのである。

以上のような、旅の途中よりも目的地の長安でさらに一層つらい思いをしなければならぬという意外な対比をしたところに、張籍の詩の独自性があるのではないかと思われる。

(橘 英範)